

## 中世ポルトガルの聖マリア信仰と文芸（上）

—愛のささやきのカンティーガ—

Fé e belas letras da Santa Maria nas cantigas medievais gelego-portuguesas, I  
As cantigas do murmurinho dos namorados

菊 地 章 太  
KIKUCHI Noritaka

### 要旨

本稿は12世紀末から14世紀中頃までイベリア半島の西側、現在はスペインのガリシア地方とポルトガルに分かれた地域で、ほぼ150年のあいだに制作されたガリシア＝ポルトガル語による世俗の詩歌カンティーガについて、そのいくつかを読み解きながら、そこに現れた中世イベリア辺境の聖マリア信仰のありようを探る試みである。構成は以下のとおりである。第1章 トロバドールの芸術 1. 詩歌の言語 2. ジャンルの多様さ 3. 『カンシオネイロ』の写本と音楽 / 第2章 愛のささやきのカンティーガ 1. ジョアン・アイラス・デ・サンティアゴ「クレセントの森の小道へ」 2. パイオ・ソアレス・デ・タヴェイロス「何より望んだことなのに」 3. ルイ・ケイマード「身に起きたことを話しましょう」 4. アイラス・ヌネス「娘よ、今日は踊りなさい」 / 第3章 愛の哀しみのカンティーガ 1. フェルナン・ロドリグス・デ・カリエイロス「愛する人は私に告げた」 2. ペロ・デ・ヴェル「あの日あなたにつれなくした」 3. ペロ・デ・ヴェル「聖マリアのもとに愛する人を」 4. サンシュ・サンシエス「愛する人はきともう」 5. ジョアン・ヴァスクス・デ・タラヴェイラ「あなたが会った私の恋人は」 6. ジョアン・ソアレス・コエリョ「どんな喜びがあるというのか」 / 第4章 旅の愁いのカンティーガ（以下次号） 1. アフォンソ・ロペス・デ・バイアン「今日、心踊らせて望むのは」 2. アフォンソ・ロペス・デ・バイアン「とてもうれしい知らせが」 3. アイラス・パイス「レサの聖マリアのもとへ」 4. アイラス・パイス「愛する人に会うために」 5. フェルナン・ド・ラゴ「ラゴの聖マリアに」 / 第5章 聖母を慕うカンティーガ 1. アフォンソ・メンデス・デ・ベステイロス「世の婦人の中で」 2. デニス1世「ああ、うるわしい婦人よ」 3. デニス1世「プロヴァンスの手法にならい」 4. デニス1世「さびしかったあの日に」 5. ペロ・ダ・ポンテ「主なる神、今あなたは」 / 第6章 中世ポルトガルの聖マリア信仰 1. 世俗のカンティーガ 2. 信仰のカンティーガ

キーワード：カンティーガ ガリシア＝ポルトガル語 聖マリア信仰 中世ヨーロッパ文学

## 第1章 トロバドールの芸術

### 1. 詩歌の言語

トロバドールと呼ばれた中世イベリアの詩人たちはガリシア＝ポルトガル語 galego-português で詩歌をつづった。これをカンティーガ *cantiga* と呼ぶ。カンティーガはイベリア半島の西側、現在はスペインのガリシア地方とポルトガルに分かれた地域で、12世紀の終わりから14世紀の中頃まで、ほぼ150年のあいださかんに制作された。それはイスラームの支配するイベリアをキリスト教徒が奪回していくレコンキスタすなわち再征服の時代と重なっている。レコンキスタの活動の中心であったイベリア中央部のカスティーリャ王国と北部のレオン王国が1230年に統合され、その勢力が南へ向かって拡大していく頃、ガリシア王国とポルトガル王国はそれに先駆けてレコンキスタを完了させた。ポルトガル南端にあるファロの陥落は1249年である。

ガリシア＝ポルトガル語はイベリア半島の北西部で話されていた言葉である。もとはポルトガル北部の町ポルトに注ぐドウロ川以北の言語であった。そこは古代ローマの属州ガラエキアにあたる地域で、ガリシア地方とポルトガルの一部にまたがっている。1143年にボルゴーニャ朝ポルトガル王国が成立し、ドウロ川の北のミーニョ川が国境として確定したのちも、その南と北で話される言葉に変化はなかった。大きく捉えるならばガリシア＝ポルトガル語の使用範囲はポルトガル南部のアルガルヴェ地方まで拡大したと考えられている<sup>(1)</sup>。それが14世紀以降に変化が現れ、やがてガリシア語とポルトガル語という現代につながる別の言語への分化がはじまった。

中世のトロバドールはそうした分化が起きる以前にひとつであった言葉、ガリシア＝ポルトガル語によってカンティーガを作ったのである。トロバドール *trobador* (現代ポルトガル語では *trovador* とつづる) の語源は、西南フランスのオクシタニア *Occitania* の言葉であるオック語の *trobador* とされる<sup>(2)</sup>。12世紀のフランスに現れた詩人たちをいう (現代フランス語のトゥルバドゥール *troubadour* にあたる)。この語の動詞形は *trobar* で、「見つける」あるいは「作る」を意味する。前者はフランス語の *trouver* やイタリア語の *trovare* に残った。名詞形トロバドールは後者の「作る」を受けており、ここでは詩歌を作る人のことである。

ガリシア＝ポルトガル語で詩作したのはトロバドールだけではない。ジョグラール *jogar* と呼ばれる人々がいた (現代ポルトガル語では *joglar* とつづり「道化」を意味する)。中世フランス語のジョグラー *jogler* あるいはジョグレオール *jogleor* (現代フランス語のジョングルール *jongleur*) がもとになっており、「芸人」を意味するラテン語のイオクラートル *joculator* が語源とされる<sup>(3)</sup>。フランスではトゥルバドゥールを詩作する詩人として理解し、ジョングルールを遍歴の芸能者として区別する傾向がある。実際に後者は踊りや大道芸もなりわいとし、聴衆の求めに応じて即興の歌を披露することとした<sup>(4)</sup>。ただポルトガルではその区別はかならずしも明瞭ではない。属する階層に応じて呼びわけたのか<sup>(5)</sup>。王侯貴族や騎士階級のトロバドールについては生涯の事績をたどる資料がいくらかは残されている。ジョグラールの多くは出自が不明だが、彼らも詩作をおこなってきた。

ガリシア＝ポルトガル語で詩作したトロバドールやジョグラールが模範としたのはオック語の詩人たちの詩歌カンソ *canço* であった。ポルトガル国王アフォンソ2世の子、のちのアフォンソ3世はブローニュ女伯マティルド2世と結婚して妻の故国フランスで暮らしていたが、1246年に帰国して

翌々年に国王に即位する。1255年に首都をコインブラからリスボンに移し、フランスから多くの文人を招いた。カンソがめざす世界は宮廷風の恋愛であり「フィナモール」《fin'amor》と呼ばれる。身分のある既婚の貴婦人に対して名も告げず愛をささげる。そうした秘めた恋の喜びと苦しみを歌いあげたのがフランスのトゥルバドールの詩歌である。これは中世の騎士道精神にかなっており、ヨーロッパの宮廷社会にひろまって文学の一大潮流となった。ガリシア＝ポルトガル語のカンティーガもこの伝統を重んじ、これにならいつつ、やがて独自の世界を切り開いていく。

カンティーガは世俗の詩歌と信仰の詩歌に分けられる。前者は『カンシオネイロ』*Cancioneiro* と呼ばれる詩歌集に収められ、187人のトロバドルとジョグラールによる1680篇の作品が伝わっている。後者の信仰の詩歌は『聖母マリア讃歌集』*Cantigas de Santa Maria* に420篇が収められた。これはカスティーリャ・レオン王国のアルフォンソ10世が編纂させたもので、作者の名はいっさい伝わらない。ガリシアやポルトガルから来た詩人たちの作品が多いとされるが、そればかりではない。カスティーリャの詩人たちもガリシア＝ポルトガル語を用いて詩作に加わったと考えられている。アルフォンソ王自身の作もいくつか含まれる<sup>(6)</sup>。法律書や歴史書など王の編纂物はいずれもカスティーリャ語で記されたが、カンティーガ集だけはガリシア＝ポルトガル語で記された。この時代にはカスティーリャでもこの言葉が詩歌をつづるために用いられた。したがって詩作がおこなわれた場合は、その言葉が話された地域とはかならずしも対応しない<sup>(7)</sup>。カンティーガの最盛期にガリシア＝ポルトガル語はもっぱら文学言語としてイベリアで重んじられていたのである。

## 2. ジャンルの多様さ

世俗のカンティーガにはさまざまなジャンルがある。そのうち作品数が格段に多いのは次の3つである。これを主要なジャンルと呼ぶことができる。

第1はカンティーガ・デ・アモール *cantiga de amor* である。「愛の歌」と訳すことができる。主体は男性であり一人称で歌われる。貴婦人を慕い、恋する心のうちを歌いあげた詩歌である。フランスのトゥルバドール芸術の伝統に沿うもので、手の届かないところにいる女性を讃美し崇拝する。その思いが相手に届くとは限らない。それでもなお忠実なしもべであろうとした。そうした宮廷風の恋愛を理想としており、節度と洗練が重んじられる。ただフランスの先例との違いもいくつかあって、カンソはリフレインをとまわらないが、カンティーガは半数以上がこれをとまなう。それでいて個々の作品の規模は小さい。前者においては抑制と屈折がないまぜになっており、後者には直情的なところが少なくない。

第2はカンティーガ・デ・アミーゴ *cantiga de amigo* である。直訳すれば「友の歌」だが、友とは男の恋人のことである。したがって女性が主体で歌われる。登場するのは第1のアモールの歌のような妙齢の貴婦人ではない。たいていは市井の娘である。初々しいまでに相手を思いつめている。恋人は目の前にいない。旅立たれたあとのさびしさ、遠くにいる人を思いつづける日々、いつか戻ってくることへの期待、もう戻ってこないというあきらめ、裏切られた悲しみ、怒り、……独白もあれば、母親や姉妹、女友だちに語りかけるものもある。作り手も歌い手も男性だったとしても、ここに展開するのは親密な女性たちの世界である。アモールの歌にくらべてよほど庶民の日常につながっている。歴史のかなたに埋もれたガリシア＝ポルトガル語歌謡の古い伝統にさかのぼるものもあるといわれ

る<sup>(8)</sup>。トロバドールもジョグラールも宮廷世界の文芸に親しみつつ、そのかたわらで民族の心を歌いあげてきた。

リスボン国立図書館が所蔵するカンシオネイロ写本の冒頭に「詩作の技術」Arte de trovar と通称される散文の覚書が附されている。そこにこのアミーゴの歌で頻繁に用いられた技法についての記述がある。ドブレ *dobre* と呼ばれる並行体の技法で、対になった詩行で同じような内容を語るが、詩行の末尾だけ変えていく。その1つとして「時制を変換させることで語〔の形〕を一致させない」*«as palavras desvairam-se porque mudam os tempos»* という技法を紹介している<sup>(9)</sup>。同じ動詞を用いても時制の活用のみを変えたのである。これについては実際の作品を読みながら確認したい。歌の形式については圧倒的多数がリフレインをとまうことも注意される。

第3はカンティーガ・デ・エスカルニオ・エ・マルディゼール *cantiga de escárnio e maldizer* である。「揶揄と悪口の歌」を意味する。風刺歌のことだが、あえて揶揄と悪口を分けたのには理由がある。これも「詩作の技術」に記述があり、揶揄の歌については「二様<sup>ふたよう</sup>に取れる隠語で語る」*«dizem-lho por palavras cobertas que hajam dous entendimentos»* とある。あからさまに語らず、いくつか解釈できる表現でカモフラージュさせたのである。かたや悪口の歌はこれ見よがしに暴露していく。したがって同じ風刺歌であってもそのありようは同じではないという<sup>(10)</sup>。やや理屈めいた説明で、実際にはそれほど截然とは分けられない。攻撃の対象は個人の日常、性生活や倫理上の問題から政治批判まで相当に範囲が広い。機微をわきまえて語るべきことなので、かなりの表現技巧を要するに違いない。それでも残されたカンティーガの4分の1以上を占めるという。人々の喝采を受けた領域だったのか。

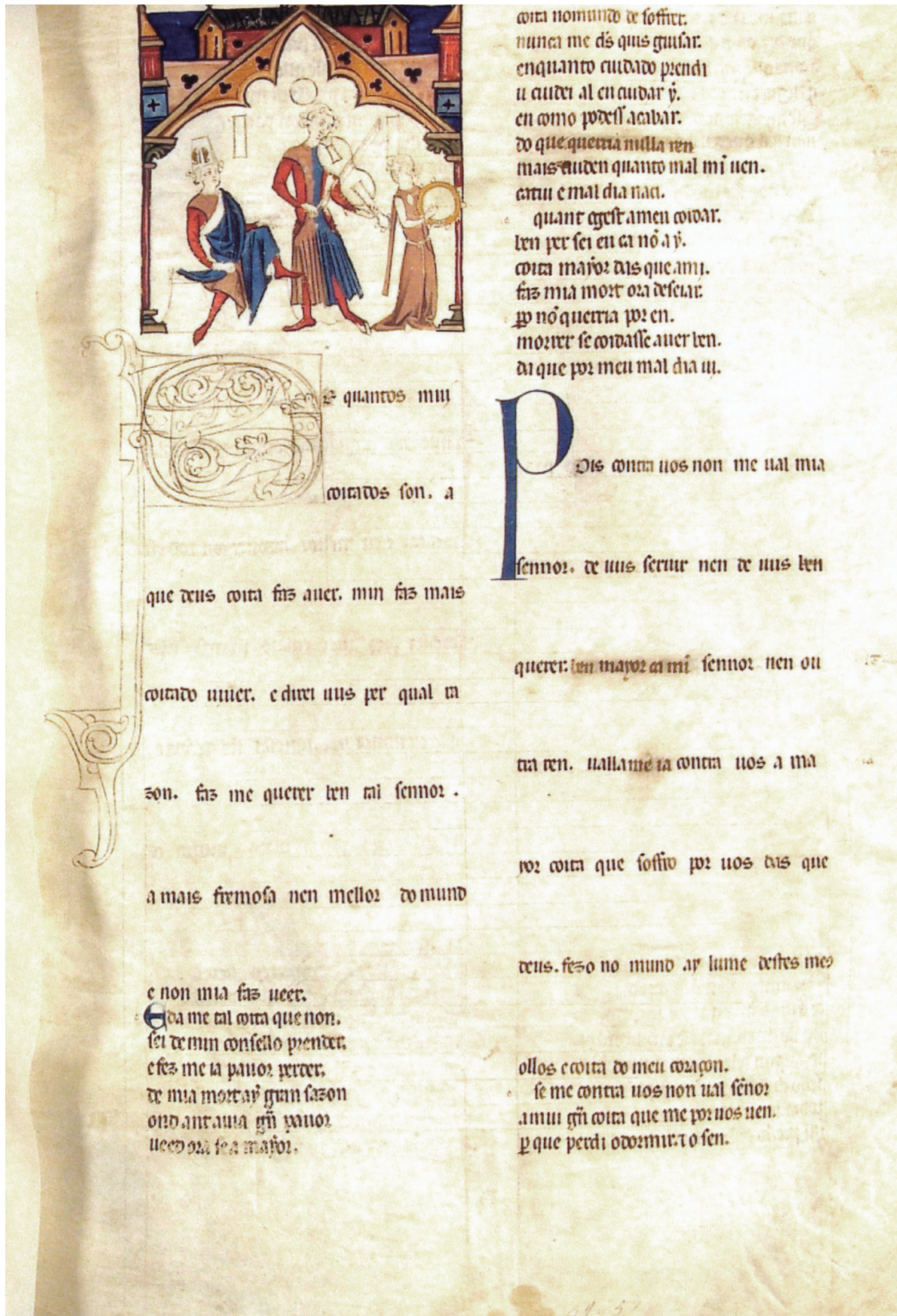
以上が世俗のカンティーガの主要な3つのジャンルだが、これ以外にもトロバドールとジョグラールが詩作に携わったものがある。討論詩テンサオン *tenção* は2人ないしそれ以上の作者が応酬をくりかえしていく。題材はさまざまで展開する方向も自在だが、討論の相手は最初の詩節で提示された形式を維持しなければならない。音節の数や脚韻が制約されるのだから、やはり高度な技術を要するだろう。フランスのテンソン *tenson* を模している。亡くなった人にささげる追悼詩プラント *pranto* もある。フランスのプラニュ *planh* がもとである。物語風の牧歌詩パストレラ *pastorela* は、トロバドールの騎士と羊飼いの娘の出会いを田園を舞台にして語っていく。騎士は娘に言い寄りながらもかわされてしまう。そうした対話の巧みさが効いている。これもフランスのパストゥレル *pastourelle* にならったものである。

本稿は世俗のカンティーガを通じて中世ポルトガルの聖母マリア信仰を理解しようとする試みであり、それになかった作品としてカンティーガ・デ・アモールから8篇、カンティーガ・デ・アミーゴから10篇、牧歌詩パストレラから1篇、追悼詩プラントから1篇を取りあげていく。討論詩には聖母は登場しない。揶揄悪口のカンティーガのことは最後にふれる。なお、信仰のカンティーガについては本紀要に5回に分けて論考を連載しつつあるので参照されたい。

### 3. 『カンシオネイロ』の写本と音楽

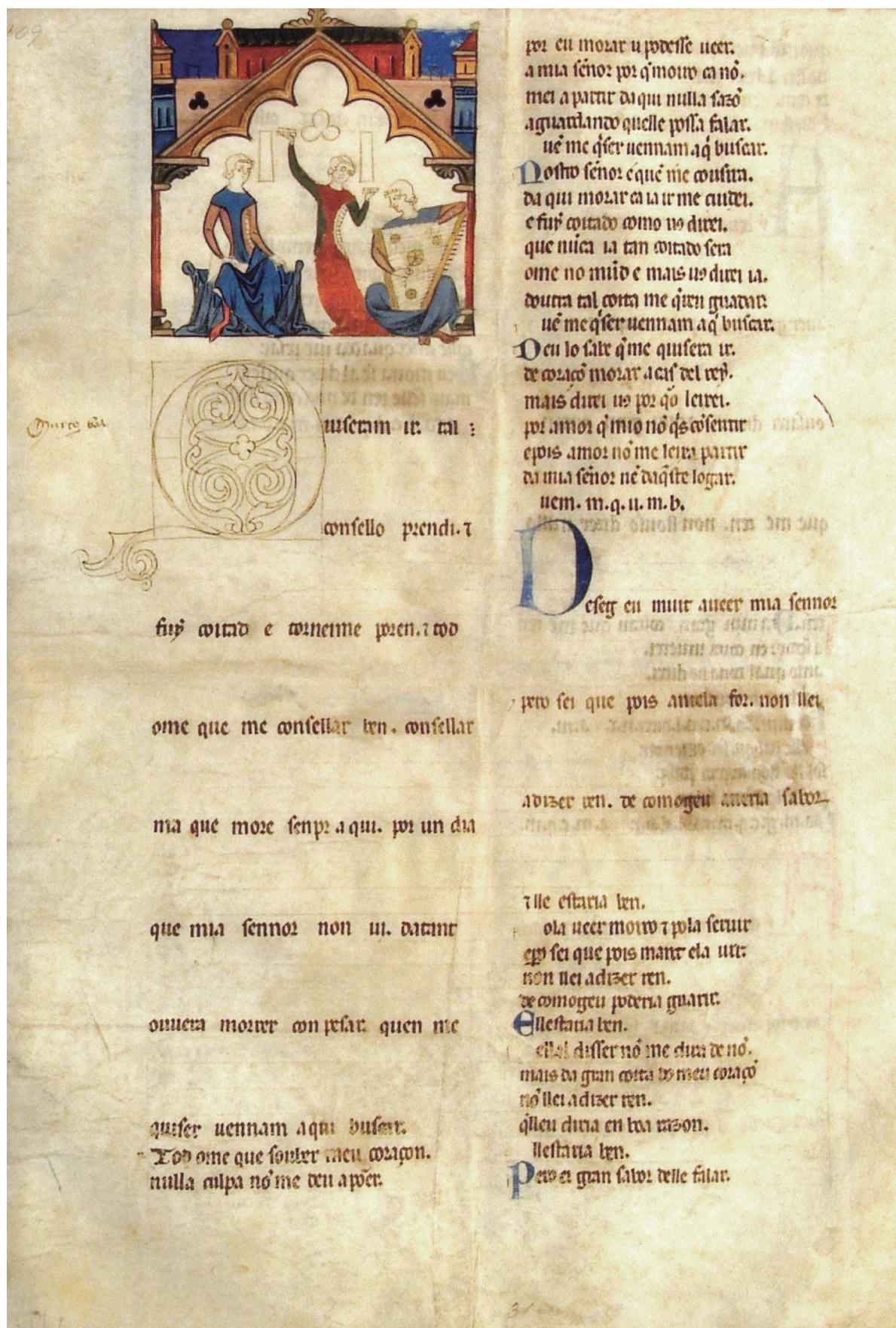
ガリシア＝ポルトガル語による世俗のカンティーガを集成したものを『カンシオネイロ』と呼ぶ。以下の3点の写本冊子と2点の断片が伝わっている。





〔図1〕 アジュダ図書館カンシオネイロ写本、21葉表





〔図2〕 アジュダ図書館カンシオネイロ写本、16葉表



- [1] アジュダ宮殿図書館 Biblioteca do Palácio da Ajuda 所蔵写本。
- [2] リスボン国立図書館 Biblioteca Nacional de Lisboa 所蔵写本 códice 10991番。
- [3] ヴァチカン教皇庁図書館 Bibliotheca Apostolica Vaticana 所蔵写本 cod. lat. 4803番。
- [4] ピアポイント・モルガン図書館 Pierpont Morgan Library 所蔵ヴィンデル写本断片。
- [5] トーレ・ド・トンボ国立公文書館 Arquivo Nacional da Torre do Tonbo 所蔵シャレル写本断片。

アジュダ写本[1]は一部が失われており、羊皮紙88葉が現存する。310篇のカンティーガが記され、内容はカンティーガ・デ・アモールが大多数である。挿画が16点残されている。いずれも各葉の第1列上段にゴシック建築のアーチを描き、その下で弦楽器をかなでる人、打楽器を手にする人、踊る人、腰掛けて演奏を聴く人などを配する[図1][図2]。楽譜は掲載されていない。素描だけの絵や彩色されていない頭文字<sup>イニシアル</sup>があるので未完成だったことが知られる。14世紀初頭の書写とされる。それならばガリシア＝ポルトガル語で詩作した最後の世代と時代を共有することになる。豪華な写本でありボルゴーニャ朝の宮廷写本所で制作されたともいわれるが、出所については不明というほかない。

19世紀初頭にリスボンの王立コレジオ・ドス・ノブレス Real Colégio dos Nobres で発見された。これは貴族の子弟のための高等教育機関で、現在はリスボン大学理学部の一部になっている。ここまでの来歴は不明である。のちにブラガンサ朝の王宮であるアジュダ宮殿に移され、共和国成立後に宮殿が国立施設になったのち附属図書館の所蔵となった。カンシオネイロ研究の先駆者のひとりカロリーナ・ミヒャエリス・デ・ヴァスコンセロス Carolina Michaëlis de Vasconcelos の校訂本がある<sup>(11)</sup>。1941年に写真版が刊行され、現在はリスボン国立図書館から全画像が公開されている<sup>(12)</sup>。

リスボン写本[2]は355葉の紙に1567篇の作品が記されており、アジュダ写本と共通するものが189篇ある。前述したジャンルのほぼすべてを収録する。冒頭の2葉4頁分に前述の「詩作の技術」と通称される覚書が附載されている。ただし首部を欠く。挿画と楽譜は掲載されていない。16世紀の前半にイタリアの人文学者アンジェロ・コロッチ Angelo Colocci が書写させたもので、欄外に彼自身の書き込みが無数にある。この人は教皇レオ10世の秘書をつとめたかわら、フランスのトゥルバドールの詩歌を収集した。リスボン写本と次のヴァチカン写本にもかかわっており、おそらく中世の写本がもとになっている。バルセロス伯ペドロ・アフォンソ Pedro Afonso, conde de Barcelos が編纂した書物がその原典ではないかと考えられている<sup>(13)</sup>。ペドロは国王ディニス1世の庶出子で、親子ともどもトロバドルとして知られた。

1878年にアドリア海に面したイタリアの町アンコナのパオロ・ブランクーティ・ディ・カッリ Paolo Brancuti di Cagli 伯爵の書斎で発見された。そのためリスボン写本は『コロッチ＝ブランクーティのカンシオネイロ』*Cancioneiro Colocci-Brancuti* と通称される。1924年にリスボン国立図書館の所蔵となった。1982年にポルトガル語文献学者ルイス・フィリペ・リンドレイ・シントラ Luís Filipe Lindley Cintra が写真版を刊行した<sup>(14)</sup>。グラサ・ヴィデイラ・ロペス Graça Videira Lopes による最新の校訂本がある<sup>(15)</sup>。これはほかの2写本と断片のすべてを含んでいる。

ヴァチカン写本[3]は210葉の紙に1205篇の作品が記されており、アジュダ写本と共通するものが56篇ある。冒頭と中間部に脱落がある。挿画と楽譜は掲載されていない。やはりコロッチが書写させたものだが、リスボン写本が手控えのような性格であるのに対し、こちらは用途が知られない。練

達の速筆で書かれている。1840年にオーストリアのロマンス語文献学者フェルディナンド・ヨーゼフ・ヴォルフ Ferdinando Josepf Wolf が教皇庁図書館で発見した。エルネスト・モナチ Ernesto Monaci の校訂本とジョアキン・テオフィロ・フェルナンデス・ブラガ Joaquim Teófilo Fernandes Braga の校訂本がある<sup>(16)</sup>。同じくリスボン国立図書館から全画像が公開されている。

ヴィンデル写本断片〔4〕は2葉の羊皮紙の表のみに7篇の作品と6篇の楽譜が記されている。14世紀の書写とされる。7篇はすべてジョグラールのマルティン・コダース Martim Codax によるカンティーガ・デ・アミーゴである。楽譜は中世の定量記譜法 *notatio mensuralis* にもとづく。二全音符その他の記号はアルフォンソ10世の『聖母マリア讃歌集』の写本に用いられたものに類似する。

1914年にマドリッドの古籍商ペドロ・ビンデル・アルバレス Pedro Vindel Álvarez が発見した。18世紀に装幀しなおしたキケロの『義務論』*De officiis* の写本があり、冊子の見返しにこの羊皮紙が貼り付けてあった。スペインの音楽学者ラファエル・ミトハナ・イ・ゴルドン Rafael Mitjana y Gordón の手にわたり、没後に遺族の手でスウェーデンのウプサラ大学図書館に寄贈された。のちにロンドンで売却され、ニューヨークのピアモント・モルガン図書館が購入した。1977年以降はヴィンデル写本M979番 Vindel ms. M979 として同館に登録されている<sup>(17)</sup>。ポルトガルではヴィンデル文書 *pergaminho Vindel* と通称される。

シャレール写本断片〔5〕は1葉の羊皮紙の表と裏に8篇の作品と7篇の楽譜が記されている。14世紀の書写とされる。8篇はすべてディニス1世のカンティーガ・デ・アモールである。楽譜は多数のメリスマ *melisma* から構成される。1音節に複数の音符を当てたもので、ここでは1音節に平均3音符を配している。音符数はヴィンデル写本断片の楽譜にくらべるとかなり多い。

1940年代の終わりごろコインブラ大学の中世史研究者アヴェリーノ・デ・ジェズス・ダ・コスタ Avelino de Jesus da Costa がポルトガル国内に伝わる写本の目録を作成していた。そのおりリスボンのトーレ・ド・トンボ国立公文書館に保管された公証役場文書のなかに写本を綴じあわせた書物を発見したが、このとき見落とした羊皮紙断片があった。これを1990年にカリフォルニア大学サンタ・バーバラ校の中世文学研究者ハーヴェイ・シャラー Harvey Sharrer が再発見した<sup>(18)</sup>。写本は破損がいちじるしく、93年に修復が企てられた。その結果かえって楽譜の大部分が損なわれてしまい、それ以前に撮影された写真で状態が知られるだけとなった。ポルトガル語の読み方でシャレール文書 *pergaminho Sharrer* と通称される。

前述の『聖母マリア讃歌集』では4つある写本のうち3つに楽譜が掲載され、420篇のカンティーガの曲がすべて伝わっている。世俗のカンティーガも曲を伴うものであったに違いない。カンシオネイロの写本で楽譜を伝えるのはわずかに2つの断片のみだが、残された13篇の曲は音楽学者によって復原が試みられ、古楽の演奏家による実演もおこなわれている<sup>(19)</sup>。

ここでは世俗のカンティーガのいくつかを読み解きながら、そこに現れた中世ポルトガルの聖マリア信仰のありようを探っていく。テキストはすべての写本を網羅したヴィンデル・ロペスの最新の校訂本をもとにし、写本ならびにほかの校訂本との異同を注記する（アジュダ写本 aj. リスボン写本 lis. ヴァチカン写本 va. ヴァスコンセロス校訂本 vas. モナチ校訂本 mo. ブラガ校訂本 br. ロペス校訂本 lo. と略記する。que を  $\bar{q}$  とするような省略、i と y、i と j、m と n、v と u の違いはここでは問題としない）。



表記については、12世紀以降ポルトガル王国に属する地名と人名は現代ポルトガル語の音をもとにした（ただしリスボンなどは慣用にしたがう）。ガリシア王国の場合は現代ガリシア語の音をもとにし、カスティーリャ・レオン王国の場合は現代スペイン語の音をもとにした。

## 第2章 愛のささやきのカンティエーガ

### 1. ジョアン・アイラス・デ・サンティアゴ「クレセントの森の小道へ」

1	Pelo souto de Crexente	クレセントの森の小道へ
2	ũa pastor vi andar	羊飼いの娘がみなから離れて
3	muit' alongada da gente	歩いていくのが見える。
4	alçando voz a cantar,	歌を口ずさみ、
5	apertando-se na saia,	裳裾をおさえながら歩いていく。
6	quando saía la raia	日の光がサール川の岸辺を
7	do sol, nas ribas do Sar.	照らしはじめたときだった。
8	E as aves que voavam	森があけそめるころ、
9	quando saía l' alvor,	鳥がみな飛び去っていく。
10	todas d' amores cantavam	少女たちは歌いながら、
11	pelos ramos d' arredor ;	郊外の分かれ道に向かっていた。
12	mais nom sei tal qu'i 'stevesse,	そこにいるのは知らない人ばかり。
13	que em al cuidar podesse	私はみそめた娘のことだけで
14	senom todo em amor.	ほかには何も考えられなかった。
15	Ali 'stivi eu mui quedo,	穏やかな気持ちでいたけれど
16	quis falar e nom ousei,	話しかける勇気もない。それでも
17	empero dix' a gram medo :	ためらいがちに声をかけた。
18	Mia senhor, falar-vos-ei	「お嬢さん、私とお話ししましょう。
19	um pouco, se mi ascuitardes,	少しだけ耳を傾けてください。
20	e ir-m' hei quando mandardes,	あなたがどこかへ行ってしまうなら
21	mais aqui nom [e]starei.	私ももうここにはいないつもりです」
22	Senhor, por Santa Maria,	「身分のある御方、聖マリアに誓って、
23	nom estedes mais aqui,	あなたはここに留まったりせずに
24	mais ide-vos vossa via,	あなたの道を進んでください。
25	faredes mesura i ;	堂々となさってください。
26	ca os que aqui chegarem,	ここに来る人たちが、あなたを

27 pois que vos aqui acharem, 見つけてしまうから。そしてここで  
28 bem dirám que mays hou' i. 聞いたことを話してしまうでしょう」

アジュダ写本、欠如。リスボン写本、967番、209葉表2列（第1詩節5行目まで）[図3]。ヴァチカン写本、554番、87葉裏2列[図4]。Monaci, p.198; Braga, pp.105sq.; Videira Lopes, I, pp.439sq.

(1) crexente /va. crexent' (2) ùa /lis. va. hùa (3) muit' alongada /lis. muyta longa, va. mo. muyta longada, br. muy' alongada; da /br. de (4) alçando /lis. alcando, va. mo. alzan do, br. alçando a (5) apertando-se /lis. [以下欠]; saia /va. mo. br. ssaya, (6) raia /va. mo. rraya (7) ribas /vo. mo. rribas; do sar /mo. dossar, br. do mar (9) l' alvor /va. mo. laluo (10) d' amores /va. damors (11) ramos /va. mo. rramos (14) senom /br. se nem (15) 'stivi /br. estivi (17) empero /va. en pero, br. eu pero (18) mia /va. mo. br. mha (19) se mi ascuitardes /va. mo. semhas cuytar des (20) hei /va. mo. mey, br. ei (22) santa /va. mo. br. sancta (25) i /br. ay (28) hou' i /va. mo. ouui, br. ouv' hy

28行4詩節の牧歌詩パストレラ。リフレインを持たない。リスボン写本附載の「詩作の伝統」ではこれを練達のカンティーガ «cantigas de meestria» と呼んでいる<sup>(20)</sup>。脚韻の形式は各詩節 ababccb である。

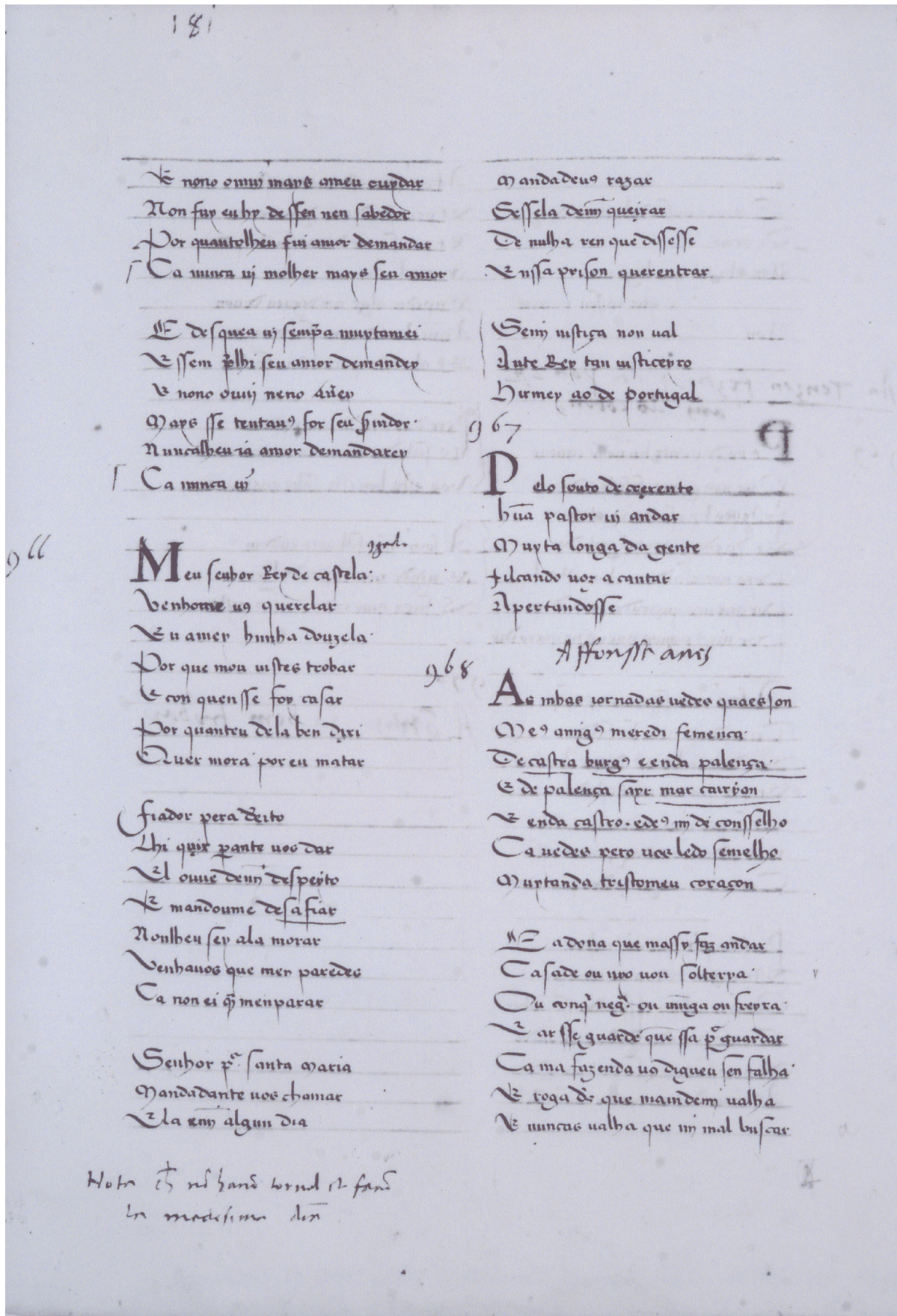
パストレラは物語風の詩歌で、ここに見るような対話形式が一般的である。田園風景のなかでトロバドールの騎士と羊飼いの娘の出会いが語られる。直接にはフランスから伝わったパストゥレルになったものだが、さかのほればラテン語の田園詩ブコリカ bucolica にいたり着く。これはパストール pastor つまり羊飼いを語り手とし、美しい田園を舞台にくりひろげられる物語詩である。そこは「心地よい場」locus amoenus でなくてはならず、アルカディアのような理想郷が選ばれた。

こうしたヨーロッパ文学の長い伝統がこの作品にも息づいている。7行目に「サル川の岸辺を」«nas ribas do Sar» とある。この川はスペイン西北のガリシア地方を潤して流れる。サンティアゴ・デ・コンポステラの近くを流れてウーリャ Ulla 川と合流し、大西洋に注ぐ。周囲は緑の濃い大西洋岸気候の土地である。ブラガは「海辺」«ribas do mar» と読んでいる。その場合、1行目の「クレセンテ」«Crexente» がどこにあるかが問題となろう。ヴィディラ・ロペスによればこの地名はガリシアにいくつもあるという。ポルトガル国境のメルガソ Melgaço の近くの村が名高いが、海にはやや遠い。サル川とすればコンポステラ教区のコンホ Conxo 近郊が候補とされる。

いずれにしてもここで語られたような、光がさしはじめた森の夜明けのすがすがしさは「心地よい場」にふさわしい。ガリシアはそうした舞台に事欠かない。森の小道は朝露が降りているだろう。そこを村の娘がひとり歩いてきた。「裳裾をおさえながら」«apertando-se na saia» とある。使われている動詞 apertar は「締めつける」あるいは「抑えつける」ことだから、どこか恥じらうようすがうかがえる。

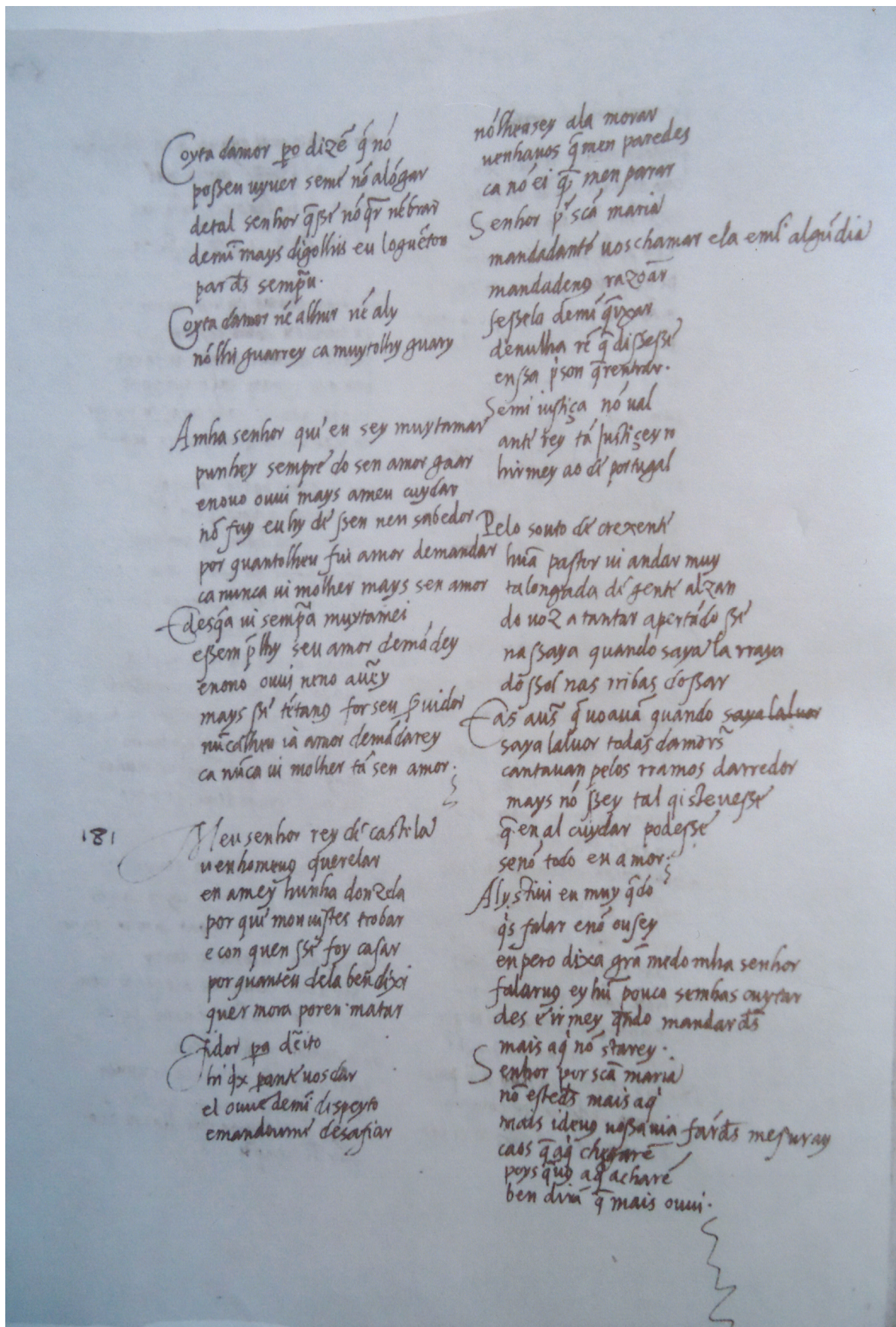
語り手のトロバドールは内気なような図々しいような、どちらだろうか。娘の方も負けてはいない。初々しいのにしたたかである。身を守らねばならないからこれは当然かもしれない。トロバドールの騎士は礼儀をわきまえたジェントルマンには違いない。けれど人気のないところで言葉をかわすことの危うさもわきまえるべきだろう。娘はそれを危惧せざるを得ない。村人のうわさ話ほど煩わしいも





〔図3〕 リスボン国立図書館カンシオネイロ写本、209葉表





〔図4〕 ヴァチカン図書館カンシオネイロ写本、87葉裏



のではないだから。

最後の詩節に「聖マリアに誓って」«por Santa Maria» とある。「聖母 [の名] によって」という意味だが、神かけて誓うときの決まり文句である。神に誓ってトロバドールの騎士にこの場を離れてほしいという。とはいえこのとき「神」に誓ったのではない。聖母に誓ったのである。ここで聖母が持ち出される点が興味深い。神の母の名はトロバドールの詩歌の中でしきりにくりかえされていく<sup>(21)</sup>。

南ヨーロッパのカトリックの国々では聖母の崇拜がきわめてさかんである。それはキリスト以上に崇拜されていると言っても言い過ぎではない。もとより聖母は神ではない。キリストは信仰 *adoratio* の対象であり、聖母は崇敬 *veneratio* の対象である。このことは教義においては厳密に区別されている。だがそれは神学の世界のことであって、日常の世界ではそうした区別はほとんど意味がない。人々は聖母に祈る。何より先に聖母に祈って、神へのとりなしを願うのである。

ポルトガルの女性の名でもっとも多いのはコンセイサン *Conceção* だという。ひびきが美しい。これは無原罪の聖母を意味する。グラサ *Graça* という名もある。恩寵の聖母のことである。アスンサン *Assunção* という名もある（これは男性にも使う）。被昇天の聖母のことである。ドーレス *Dores* という名もある。七つの悲しみの聖母 *Nossa Senhora das Sete Dores* の最後の語で、「悲しみ」を意味する。これを女性の名としたのである。これがなかなか多い。いずれもその崇拜は中世から今にいたるまでつづいている。

1910年までポルトガル王国を支配したブラガンサ朝の守護者も聖母マリアだった。共和国になってからもこの伝統はいささかも変わりがない。王家が聖母を崇拜した歴史は始祖ヌーノ・アルヴァレス・ペレイラ *Nuno Álvares Pereira* の時代にさかのぼり、14世紀にエヴォラ大司教区に建てられたブラガンサ侯爵家の礼拝堂に無原罪の聖母がまつられた。1982年に教皇ヨハネ・パウロ2世がポルトガルを訪問したとき祈禱をおこなったのは、ファティマにある奇跡の聖母の大聖堂とこのブラガンサの礼拝堂であった。ポルトガルが聖母の国であることは今も昔も変わりがない。

作者のジョアン・アイラス・デ・サンティアゴ *João Airas de Santiago* はガリシア出身のトロバドールである。カンティーガ・デ・アモール20篇、カンティーガ・デ・アミーゴ46篇（うち1篇は題名のみ）、揶揄悪口のカンティーガ10篇、討論詩2篇、牧歌詩1篇、ジャンル不明のカンティーガ2篇、あわせて81篇が伝わる。これはかなりの量であり、重要なトロバドールのひとりと言ってよい。

討論詩の附記 *rubrica* にみずから「サンティアゴのジョアン・アイラス」«Joam Airas de Santiago» と名のつておりその出自が知られる<sup>(22)</sup>。それ以上に伝記をたどれる資料がほとんどない。妻と連名の訴訟記録があり、1302年の日付がある<sup>(23)</sup>。土地の所有権についてサンティアゴ・デ・コンポステラの司祭と係争したときの記録とされる。1260年の文書にコンポステラの「大司教ヨアンニス・アリエス」«archiepiscopi Iohannis Arie» の名が記してある<sup>(24)</sup>。これはジョアン・アイラスのラテン語表記である。ただしこれは同名異人とも考えられている。

いくつかの作品から類推できるのは、彼がカスティーリャにおもむいてアルフォンソ10世の宮廷に出入りしたことである<sup>(25)</sup>。ポルトガルにくだってディニス1世にも仕えた<sup>(26)</sup>。13世紀後半に活動したことは確実であろう。ついだが、「私は目が悪いのではと噂される」«Dizem, senhor, que nom hei eu poder de veer bem» となげいた作品がある<sup>(27)</sup>。事実として作者自身かなりの近視だったとされる。

ジョアン・アイラスが残したただひとつのこの牧歌詩は、ガリシア＝ポルトガル語によるトロバドール

ル芸術のうちもっとも美しい作品のひとつとして知られる。村の娘があらぬうわさを立てられるのを恐れ、騎士に立ち去ってくれるよう懇願する。聖母マリアに誓ってそうしてほしいという。そんなとき真っ先に心に浮かび、懸命にすぎたのが聖母だった。こうした思いに注目していきたい。

## 2. パイオ・ソアレス・デ・タヴェイロス「何より望んだことなのに」

- |    |   |                     |
|----|---|---------------------|
| 1  | A rem do mundo que melhor queria,       | 世の中で何より望んだことなのに     |
| 2  | nunca m' en bem quis dar Santa Maria ;  | 聖マリアは私にお恵みくださらないのか。 |
| 3  | mais quant' end' eu no coração temia,   | そのことで私の心は乱れてばかりいる。  |
| 4  | <i>ei, ei, ei,</i>                      | ああ、ああ、ああ、           |
| 5  | <i>Senhor, senhor, agora vi</i>         | 愛する人、愛する人、今あなたを     |
| 6  | <i>de vós quant' eu sempre temi!</i>    | 思いつめ、心は乱れるばかり。      |
|    |   |                     |
| 7  | A ren do mundo que eu mais amava        | 世のなかの誰よりも愛して、       |
| 8  | e mais servia, nem mais desejava,       | 誰よりもお仕えし、誰よりも求めた人を  |
| 9  | Nostro Senhor, quant' end' eu receava,  | 主よ、そのことで私は恐れている。    |
| 10 | <i>ei, ei, ei,</i>                      | ああ、ああ、ああ、           |
| 11 | <i>Senhor, senhor, agora vi</i>         | 愛する人、愛する人、今あなたを     |
| 12 | <i>de vós quant' eu sempre temi!</i>    | 思いつめ、心は乱れるばかり。      |
|    |   |                     |
| 13 | E que farei eu, cativ' e coitado ?      | どれほどつらい苦しみを抱くだろう。   |
| 14 | Que eu assi fique, desamparado          | あなたから離れてしまったら、      |
| 15 | de vós, por que coita grand' e cuidado, | どんなにか大きな悲しみと苦しみを。   |
| 16 | <i>ei, ei, ei,</i>                      | ああ、ああ、ああ、           |
| 17 | <i>Senhor, senhor, agora vi</i>         | 愛する人、愛する人、今あなたを     |
| 18 | <i>de vós quant' eu sempre temi!</i>    | 思いつめ、心は乱れるばかり。      |

アジュダ写本、32番、8葉表1～2列。リスボン写本、147番、37葉裏2列。ヴァチカン写本、欠如。Vasconcelos, pp.71sq. ; Videira Lopes, II, pp.234sq.

(2) *santa* /aj. lis. vas. *sancta* (4) *ei* /aj. lis. vas. *ei*, lo. *hei* (6) *vós* /aj. vus (13) *coitado* /aj. vas. *cuitado* (15) *coita* /ja. vas. *cuita* ; *cuidado* /lis. vas. *coidado*

18行3詩節のカンティーガ・デ・アモール。リフレインをとまなう。脚韻の形式は aaaddd bbbddd cccddd である。

愛する女性を思うあまり、望みをかなえてくれない聖母に恨み言をぶつけている。だがその危惧は現実となってしまう。同じ作者のカンティーガ「私の目よ、神は今おまえにこんなにも大きな悲しみを見せようとしている」«Meus olhos, quer-vos Deus fazer ora veer tam gram pesar» に語られたと

おり、その女性は別の男と結ばれることになった<sup>(28)</sup>。そこには聖母は登場しない。運命という神の残酷なはからいのまえに、もはや聖母にすぎる余地もなくなったのか。ここではまだ神の母に求めるところがあったのだろう。

この作品の注目すべきところはもうひとつある。リフレインの最初に「ああ」«ei» という感嘆詞がくりかえされる。これ自体は意味をもたないが、動詞 *aver*（現代ポルトガル語の *haver*）の一人称の活用形でもある。つまり掛け言葉になっていて、ここでは「感じている」あるいは「わかっている」と訳せようか。トロバドールが用いる「言葉あわせ」*jogo* の技法のひとつである。ヴィディラ・ロペスも記すとおり、カンティーガの曲が伝わっていたら興味深い。聞かせどころ、いわゆる「さび」にちがいない。楽譜が残っていないのが残念である。

パイオ・ソアレス・デ・タヴェイロス Paio Soares de Taveiros はガリシア出身のトロバドールである。現在のガリシア州ポンテベドラ県ア・エストラダ A Estrada にタヴェイロスという地名があり、ここから出た一族である。1220年の不動産契約の書類にパイオ・ソアレスのラテン語表記ペラギオ・スエリイ Pelagio Suerii という名があるという<sup>(29)</sup>。兄ペロ・ヴェーリヨ Pero Velho と合作した討論詩テンサオンの附記に、ふたりが「ドン・ロドリゴ・ゴメス・デ・トラスタマラの妻ドナ・マイオルの家にいた」«que andavam em cas Dona Maior, molher de Dom Rodrigo Gomes de Trastamar» とある<sup>(30)</sup>。ここからトロバドール兄弟とガリシアの大貴族とのつながりが知られる。ドン・ロドリゴはカスティーリャの王フェルナンド3世とアルフォンソ10世の宮廷に出入りし、1261年に亡くなった。その妻ドナ・マイオル・アフォンソ・デ・メネゼス Dona Maior Afonso de Menezes の没年は1266年以前とされる<sup>(31)</sup>。以上のことからパイオ・ソアレスの活動時期はおおむね13世紀のなかごろまでと考えられており、これはガリシア＝ポルトガル語で詩作したトロバドールのなかでもかなり早い時期にあたる。

なお、アジュダ写本のなかでパイオ・ソアレスの作とされるカンティーガを収めた箇所的前後に脱落がある。そのため一部はパイオ・ソアレスではなくアルフォンソ10世の作とすべきではないかという意見が出された<sup>(32)</sup>。本作品はそこには該当しないが、この説は現在までのところ有力な支持がない<sup>(33)</sup>。現在のところ彼の手には帰せられているのは、カンティーガ・デ・アモール7篇、カンティーガ・デ・アミーゴ2篇、討論詩2篇、ジャンル不明のカンティーガ2篇、あわせて13篇である。

### 3. ルイ・ケイマード「身に起きたことを話しましょう」

- |  |                        |
|--|------------------------|
| 1 De mia senhor direi-vos que mi avém :  | 愛する方、身に起きたことを話しましょう。   |
| 2 porque a vejo mui bem parecer,         | 私の目にあなたがとても美しく映るので、    |
| 3 tal bem lhe quer' onde cuid' a morrer. | 死ぬほど思うくらいにあまりに美しく、     |
| 4 E pero que lhe quero tam gram bem,     | こんなにも美しいあなたを愛したけれど、    |
| 5 <i>ainda lh' eu mui melhor querria</i> | それができたなら、もっとたくさん愛そうと   |
| 6 <i>se podesse... mais nom poderia.</i> | したのだけれど、……でも私にはできなかった。 |
| 7 Ca lhe quero tam gram bem que perdi    | とても美しいあなたを愛し、眠ることさえ    |

- |    |   |                        |
|----|---|------------------------|
| 8  | já o dormir ; e, de pram, perderei      | 忘れるほどだった。そのとき抱いた苦しみで   |
| 9  | o sem mui cedo com coita que ei.        | たちまち理性をうしなってしまった。      |
| 10 | E pero que tod' aquesto perç' i,        | すべてをそこでうしなったのだ。        |
| 11 | <i>ainda lh' eu mui melhor querria</i>  | それができたなら、もっとたくさん愛そうと   |
| 12 | <i>se podesse... mais nom poderia.</i>  | したのだけれど、……でも私にはできなかった。 |
| 13 | Ca lhe quero bem tam de coraçom         | こんなに美しいあなたを心から愛しているから  |
| 14 | que sei mui bem que, se m' ela nom val, | 私はそれでよい。たとえあなたが私を支えず   |
| 15 | que morrerei cedo, nom á i al.          | すぐに死んだとしても、疑う気持ちなどない。  |
| 16 | E com tod' esto, si Deus me pardom.     | そうなっても神はゆるしてくださるだろう。   |
| 17 | <i>ainda lh' eu mui melhor querria</i>  | それができたなら、もっとたくさん愛そうと   |
| 18 | <i>se podesse... mais nom poderia.</i>  | したのだけれど、……でも私にはできなかった。 |
| 19 | Per nulha rem, par Santa Maria.         | 聖マリアに誓って、それはあり得ない。     |
| 20 | Ca se podesse, log' eu querria.         | それができたなら。すぐに好きになるなんて。  |

アジュダ写本、139番、36葉表1列。リスボン写本、260番、67葉裏2列。ヴァチカン写本、欠如。Vasconcelos, pp.281sq. ; Videira Lopes, II, p.487.

(1) mia /lis. miha : vos /vas. vus (2) vejo /aj. veia (3) cuid /aj. vas. coid (9) ei /aj. lis. vas. ei, lo. hei (11) melhor /aj. mellor (14) que /lis. [lacuna] (15) á /aj. lis. vas. á, lo. há ; i /lis. hi (16) pardom /aj. vas. perdon (19) santa /aj. lis. sancta (20) log' /lis. logu

20行4詩節のカンティーガ・デ・アモール。リフレインをとまなう。脚韻の形式は第1詩節から第3詩節まで各詩節 abbacc である。

トロバドールは貴婦人の美しさのまえに、何もかもうしなつて、ただひたすらに、死ぬほどに彼女を愛してしまった。もっと彼女を愛そうとしたがそれはできない。もはや絶対の愛の高みに登りつめてしまったためである。彼の目には「あなたがとても美しく映るので」«porque a vejo mui bem parecer» という。ひとめ見ただけかもしれない。中世のトロバドールにはそれで十分なのである。見ることもさえず、話に聞いただけでその女性を愛し、ついには愛に殉じることさえあった。今ではおよそあり得ない話だが、むしろこれこそが彼らの理想とする宮廷風の恋愛「フィナモール」の世界なのである。

フランスには偉大な先例がある。ジャウフレ・リュデル Jaufré Rudel の作品で、「遠い愛を望み求める者と誰もが私を呼ぶとおりに」«Ver ditz qui m'apella lechay ni deziron d'amor de lonh» と歌われる<sup>(34)</sup>。ここから「遠い愛」の伝説が生まれた。会ったこともない異国のトリポリ伯夫人に恋心を抱き、船で地中海を渡って会いに行く。その途上で病を得て夫人の腕の中で息をひきとる話である<sup>(35)</sup>。この作品は曲も伝わっており、ドイツを代表する吟遊詩人<sup>ミンネゼンガー</sup>のヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデがこれをもとに歌を作り、フランスのエドモン・ロスタンが戯曲に仕立て、サラ・ベルナールが



演じ、アルフォンソ・ミュッシャが挿画を描いた。ヨーロッパの愛のかたちのひとつの典型と言ってよい。

ガリシア＝ポルトガルの作品にもどってみれば、フランスのトゥルバドゥール芸術との違いは明らかである。なんとも表現が大仰であり、フランスの詩歌とは比較にならないほど短い分量のなかに、ほとんど同じような内容の言葉をたたみかけていく。思いのひたむきさがそこにはある。しかも愛に殉じるときでさえ聖母を持ち出してくる。

作者はこれと似たようなカンティーガ・デ・アモールをいくつも作っており、同じように「愛する方、私の身に起きたことを話しましょう」*«Direi-vos que mi aveo, mia senhor»* と歌いだす<sup>(36)</sup>。弟子のペロ・ガルシア・ブルガレス Pero Garcia Burgalês がこれを揶揄して「ルイ・ケイマードはいくつもの歌の中で聖マリアに誓って愛に殉じた」*«Roi Queimado morreu com amor em seus cantares, par Santa Maria»* と歌ったほどである<sup>(37)</sup>。

ルイ・ケイマード Rui Queimado はポルトガル出身のトロバドールで、下級貴族に属する。ポルトガル王アフォンソ3世の時代、1258年に貴族と聖職者の領地を対象とした悉皆調査がおこなわれた。王権侵害を取り締まる措置で、王領検地 *Inquirições gerais* の名で呼ばれる。このときの調査でリマ Lima 川の支流ヴェス Vez 川流域、現在のヴィアナ・ド・カステル県に一族の名が記載された。そこに登場するペロ・マルティンス・ケイマード Pero Martins Queimado がルイの兄弟とされる<sup>(38)</sup>。そうであればポルトガル語の父称はマルティンスだったことになるだろう。

彼は揶揄悪口のカンティーガにおいてドン・エシュテヴァン Dom Estêvam という名のトロバドールを風刺している<sup>(39)</sup>。カスティーリャのアルフォンソ10世の宮廷に出入りしたトロバドールの幾人かもこの人物を題材としたカンティーガを制作した<sup>(40)</sup>。ルイ・ケイマードもその集団のひとりとされる。自身もトロバドールであったソウザ伯ゴンサロ・ガルシア Gonçalo Garcia, conde de Sousa の巡歴に随行したともいわれるが確かな資料はない。伯爵の没年は1285年以後である<sup>(41)</sup>。

現在まで伝わる作品は、カンティーガ・デ・アモール12篇、カンティーガ・デ・アミーゴ4篇、揶揄悪口のカンティーガ4篇、ジャンル不明のカンティーガ3篇、あわせて23篇である。

#### 4. アイラス・ヌーネス「娘よ、今日は踊りなさい」

- 1 - Bailade hoje, ai filha, que prazer vejades,
- 2 ant' o voss' amigo, que vós moit' amades.
- 3 - Bailarei eu, madre, pois me vós mandades,
- 4 *mais pero entendo de vós ãa rem :*
- 5 de viver el pouco moito vos pagades,
- 6 *pois me vós mandades que baile ant' el bem.*

—娘よ、今日は踊りなさい。満足のいくまで。

おまえがとても大事にしている人の前で。

—お母さん、踊ります。おっしゃるとおりに。

けれどお母さんは大事なことを知っているはず。

彼はもう長くない。お母さんが満足なさるように、  
あの人の前で美しく踊るようにおっしゃるなら。

7 - Rogo-vos, ai filha, por Deus, que bailedes

8 ant' o voss' amigo, que bem parecedes.

9 - Bailarei eu, madre, pois mi o vós dizedes,

10 *mais pero entendo de vós ãa rem :*

11 de viver el pouco gram sabor havedes,

12 *pois me vós mandades que baile ant' el bem.*

—娘よ、主に誓って願いなさい。おまえの愛する

あの人の前で、みごとな踊りができるように。

—お母さん、踊ります。お母さんがそうおっしゃるなら。

けれどお母さんは大事なことを知っているはず。

彼はもう長くない。お母さんがよろこばれるなら、

あの人の前で美しく踊るようにおっしゃるなら。

13 - Por Deus, ai mia filha, fazed' a bailada

14 ant' o voss' amigo, de sô a milgranada.

15 - Bailarei eu, madre, daquesta vegada,

16 *mais pero entendo de vós ãa rem :*

17 de viver el pouco sodes moi pagada,

18 *pois me vós mandades que baile ant' el bem.*

—私の娘、主に誓っておまえは踊りなさい。

おまえの愛する人の前で。石榴の花の下で。

—お母さん、踊ります。今度もまた。

けれどお母さんは大事なことを知っているはず。

彼はもう長くない。とても満足なさるように、

あの人の前で美しく踊るように言うのなら。

19 - Bailade hoj', ai filha, por Santa Maria,

20 ant' o voss' amigo, que vos bem queria.

21 - Bailarei eu, madre, por vós todavia,

22 *mais pero entendo de vós ãa rem :*

23 em viver el pouco tomades perfia,

24 *pois me vós mandades que baile ant' el bem.*

—娘よ、今日は踊りなさい。聖マリアに誓って。

おまえを求めている愛する人の前で。

—お母さん、踊ります。お母さんのためにもっと。

けれどお母さんは大事なことを知っているはず。

彼はもう長くない。お母さんは思いつめている。

あの人の前で美しく踊るようにおっしゃるなら。

アジュダ写本、欠如。リスボン写本、881番、186葉裏1～2列。ヴァチカン写本、464番、73葉裏2列～74葉表1列。  
Monaci, pp.170sq.; Braga, pp.87sq.; Videira Lopes, I, p.129.

(1) hoje /lis. va. mo. oie, br. oje; (2) ant' o /lis. va. mo. anto; voss' amigo /lis. va. mo. uossa migo [8, 14, 19行も同様]; moit' amades /lis. va. mo. moita mades, br. muit' amades (4) ùa /lis. hua, va. br. hũa [10, 22行も同様] (5) moito /lis. br. muyto, va. mo. meyto (6) ant' el /lis. va. mo. antel (7) rogo-vos /lis. va. mo. rogouos (9) mi o /lis. va. mo. mho, br. m' o; dizedes /lis. va. mo. dicesdes (10) entendo de /va. mo. entendede (11) havedes /lis. va. mo. br. avedes (12) me vós /va. mo. br. que me (13) fazed' a /lis. va. mo. fazeda (14) a milgranada /lis. va. mo. amil granada, br. a frol granada (15) eu /br. eu y; daquesta /mo. da questa, br. d' aquesta (16) mais pero /lis. va. mo. may, br. mays; ùa /va. hua, br. uma (17) viver /lis. va. mo. uiu' el, moi /br. muy; pagada /lis. pagada poys, va. mo. pagata poys (18) me /br. que me (19) hoj' /va. mo. ei, br. oj'; santa /lis. va. mo. br. sancta (23) viver /lis. va. mo. uiu' el (24) me vós /lis. va. mo. que, br. que me

24行4詩節のカンティーガ・デ・アミーゴ。母と娘の対話からなる。各詩節の4行目と6行目にリフレインがあり、応答する側が1行おきに同じ言葉をくりかえしていく形である。脚韻の形式は各詩節 aaabab である。

母が娘に踊るようにうながす。娘を愛する青年のまえでみごとな踊りが披露できるようにと、くりかえし主に祈り、そして最後は聖母に祈る。娘の大事な人がもう長くは生きられないことを母は知っていた。娘もそれに応えていくのである。

アイラス・ヌーネス Airas Nunes はガリシア出身のトロバドール。アルフォンソ10世の宮廷に仕えた聖職者である。『聖母マリア讃歌集』のエル・エスコリアル図書館所蔵写本 (j.b.2) に名が附記してある。おそらく主要な作者のひとりであり、編纂にもかかわったと考えられている<sup>(42)</sup>。王の没後はひきつづきサンチョ4世に仕えた。1284年に馬1頭と衣服の購入代金が支給された記録がある<sup>(43)</sup>。それにかかわるカンティーガのなかに「私の白髪頭」«meus cabelos canos» という言葉が出てくる<sup>(44)</sup>。このときすでに老齢だったのか。翌々年の1286年にサンチョ王はサンティアゴ・デ・コンポステラに巡礼した。これも同じくカンティーガに語られている<sup>(45)</sup>。

現在まで伝わる作品は、カンティーガ・デ・アモール6篇、カンティーガ・デ・アミーゴ3篇、揶揄悪口のカンティーガ3篇、牧歌詩パストレラ1篇、時事問題をあつかうシルヴェンテス sirventês 1篇、あわせて14篇である。いずれもフランスのトゥルバドゥール芸術にならった熟練の技巧による作品として評価されてきた。

### 第3章 愛の哀しみのカンティーガ

#### 1. フェルナン・ロドリグス・デ・カリエイロス「愛する人は私に告げた」

- |                                     |                        |
|-------------------------------------|------------------------|
| 1 Disse-m' a mi meu amigo,          | 愛する人は私に告げた。            |
| 2 quando s' ora foy sa via,         | 立ち去っていくそのときに、          |
| 3 que nom lh' estevess' eu triste   | 私が悲しんだりしないようにと。        |
| 4 e cedo se tornaria ;              | すぐに戻ってくるのだからと。         |
| 5 <i>e são maravilhada</i>          | 私はただ歎くばかり。             |
| 6 <i>por que foi esta tardada.</i>  | こんなに時が経ってしまうなんて。       |
|                                     |                        |
| 7 Disse-mi a mi meu amigo,          | 愛する人は私に告げた。            |
| 8 quando s' ora foi daquém,         | ここにいたそのときに、            |
| 9 que nom lh' estevess' eu triste   | 私が悲しんだりしないようにと。        |
| 10 e tarda e nom mi vem ;           | 遅くなったり、戻らないことなどないと。    |
| 11 <i>e são maravilhada</i>         | 私はただ歎くばかり。             |
| 12 <i>por que foi esta tardada.</i> | こんなに時が経ってしまうなんて。       |
|                                     |                        |
| 13 Que nom lh' estevess' eu triste  | 私が悲しんだりしないようにと、        |
| 14 [e] cedo se tornaria             | すぐに戻ってくるからと [あの人は告げた]。 |
| 15 e pesa-mi do que tarda,          | それからずいぶん経つことが心にのしかかる。  |
| 16 sabe-o Santa Maria ;             | 聖マリアはそのことを知っておられる。     |
| 17 <i>e são maravilhada</i>         | 私はただ歎くばかり。             |
| 18 <i>por que foi esta tardada.</i> | こんなに時が経ってしまうなんて。       |
|                                     |                        |
| 19 Que nom lh' estevess' eu triste  | 私が悲しんだりしないようにと。        |
| 20 [e] tarda e nom mi vem,          | 遅くなったり、戻らないことなどないと。    |
| 21 e pero nom é por cousa           | けれども、何かわけがあるのでなければ、    |
| 22 que m' el nom quera gram bem ;   | 私は多くのことを求めている。         |
| 23 <i>e são maravilhada</i>         | 私はただ歎くばかり。             |
| 24 <i>por que foi esta tardada.</i> | こんなに時が経ってしまうなんて。       |

アジュダ写本、欠如。リスボン写本、632番補、138葉裏1～2列。ヴァチカン写本、234番、33葉裏2列～34葉表1列。Monaci, pp.90sq. ; Braga, p.47 ; Videira Lopes, I, p.366.

(1) m' a mi /lis. va. mo. mhami (2) s' ora /lis. va. mo. ssora (3) lh' estevess' eu /lis. va. mo. lhesteusseu [9, 13, 19行も同様] (5) são /lis. va. mo. br. soo (6) por que /br. porque (7) disse-mi a mi /va. mo. dissehami, br. disse-m' a mi (8) s' ora /lis. va. mo. sora ; daquém /lis. mo. da que, va. da qué, br. d' áquem (10) tarda /va. mo.



carda (14) se tornaria /va. s' tornaria (15) e pesa-mi /lis. e pesami, va. mo. epesami, (16) santa /lis. mo. sancta (21)  
por cousa /mo. p' cousa (22) quera /br. queira

24行4詩節のカンティーガ・デ・アミーゴ。リフレインをとまう。リスボン写本とヴァチカン写本はともに各詩節6行とし、モナチ校訂本とブラガ校訂本もこれにしたがうが、それでは脚韻がそろわない。ヴィデイラ・ロペス校訂本は1～2行と3～4行をあわせて各詩節4行とする。その場合の脚韻の形式は aadd bbdd ccdd bbdd である。

いたわりの言葉ばかりで実のない男をこの娘はこれから先も待ちつづけるのか。カンティーガ・デ・アミーゴのなかには若い娘が母親や姉妹、女友だちに悩みを語り、あるいは嘆きを訴えるものが少なくないが、ここには語りかける相手はいない。独白である。それでも聖母が心の中にいてくれる。それだけがなぐさめなのか。

聖母の信仰がさかんなポルトガルやガリシアでは教会へ行くと祭壇や礼拝室に聖母の像がまつられており、古い家であれば家庭祭壇に小さな聖母像が置いてある。そのまえて人々は祈っている。そうした光景が日常のなかにある人々にとって、心のなかにいつも聖母がいるのかもしれない。それは具体的な、まぶたに浮かぶ聖母像であったにちがいない。

フェルナン・ロドリグス・デ・カリエイロス Fernão Rodrigues de Calheiros はポルトガル出身のトロバドル。いったいガリシア＝ポルトガル語で詩作したトロバドルやジョグラールについては、そのほとんどは伝記が知られない。公文書等に記載された人名が手がかりとなるが、同名異人の場合もあるから注意したい。アフォンソ3世が1252年に公布した土地契約書の証人のなかに、ポルトガル最北の古都ポンテ・デ・リマ Ponte de Lima に住むパイオとペロ・ロドリグス・デ・カリエイロス Paio e Pero Rodrigues de Calheiros 兄弟と連名でフェルナンの名が記載されている。彼らの母サンシャ・メンデス Sancha Mendes はメン・ドウ・アラウド Mem do Alaúde の庶子とされ、この人はジョグラールだったという<sup>(46)</sup>。祖母の血がフェルナンにも流れていたのか。

最近ではトロバドルの活動時期をさかのぼらせていく傾向があり、ルイ Rui（あるいはロドリーゴ Rodrigo）・フェルナンデス・デ・カリエイロスの息子フェルナンド・ロドリゲス Fernando Rodrigues をこのトロバドルと同一人物と見なす意見がある。ルイは1195年にスペイン北部のブルゴスでカラトラバ騎士団 ordem de Calatrava に属するゴンサロ・アネス・ダ・ノヴォア Gonçalo Anes da Nôvoa の不動産契約に立ち会っている。このゴンサロ・アネスはトロバドルであったオゾイロ・アネス Osoiro Anes の兄弟で、ここにルイの息子がトロバドルであることの接点も求められるという<sup>(47)</sup>。

現在まで伝わる作品は、カンティーガ・デ・アモール20篇、カンティーガ・デ・アミーゴ8篇、揶揄悪口のカンティーガ3篇、ジャンル不明のカンティーガ1篇、あわせて32篇である。

## 2. ペロ・デ・ヴェル「あの日あなたにつれなくした」

- |   |                                      |                     |
|---|--------------------------------------|---------------------|
| 1 | Assanhei-me-vos, amigo, n' outro dia | 愛する人、あの日あなたにつれなくした。 |
| 2 | mais ben' o sab' ora Santa Maria,    | でも聖マリアはそのわけをご存知だった。 |

- |   |                                    |                      |
|---|------------------------------------|----------------------|
| 3 | que nom foi por vosso mal,         | 私がそうしたのはあなたが悪いのではなく、 |
| 4 | per boa fe, meu amigo, foi por al. | 聖母に誓って、別のわけがあつてのこと。  |

アジュダ写本、欠如。リスボン写本、1129番、242葉表1列。ヴァチカン写本、721番、115葉裏1列。Monaci, p.254 ; Braga, p.138 ; Videira Lopes, II, p.336.

(1) assanhei /va. mo. assan hey, n' outro /lis. va. mo. noutro (2) ben' o /lis. va. mo. beno ; sab' ora /lis. sabora, va. mo. sa bora (4) boa /lis. va. mo. br. boa, lo. bôa ; fe /lis. mo. br. fe, va. lo. fé

4行1詩節のカンティーガ・デ・アミーゴ。脚韻の形式は aabb である。リスボン写本には3行目にリフレインの記号が附してある。このことから写字生は本作品を第1詩節だけが伝わった断片と理解したことが知られる。

ひとりの女性が恋人につれない態度をとった。決して彼のせいではないとなだめている。別の事情のためだからという。本作品が断片であるならば、そこに至るいきさつは失われた詩節で語られていたかもしれない。ヴィディラ・ロペスはそのように考えている<sup>(48)</sup>。そうかもしれないが、これだけで十分とも言える。この4行詩からでも物語ははじまっていく。

「聖母に誓って」«per boa fe» は直訳すれば「信心から」つまり神かけて誓うときの慣用表現だが、そこまで硬い意味もなく「善意から」くらいの含みかもしれない。それならば「あなたのことを思つて」とも訳せるが、ここはやはり「聖マリアはそのわけをご存知だった」と響きあう言葉がほしい。聖母に誓った。それは取り消せないことだと納得してもらうのが、せめてもの思いやりだったのか。これも聖母の信仰が人々の日常とともにある風土でなければ想像しにくい。相手を傷つけずに離れていく。そうした痛みが言葉のうしろににじんでいる。

ペロ・デ・ヴェル Pero de Ver は出身地不詳のジョグラール。伝記についてもまったく知られない。これは多くのジョグラールと同様である。ガリシアの北東(現在のルーゴ県)に位置するティエラ・デ・レモス Tierra de Lemos 近郊のサン・ヴィセンテ・デ・ヴェル San Vicente de Ver の村が出身地ともいわれる<sup>(49)</sup>。作品のなかにジュリャン Julham という地名が出てくる<sup>(50)</sup>。これはルーゴの町の南にある巡礼地サン・シュリアン San Xulián に同定されている。そこからさらに南へくだったラマス Lamas 近郊のサン・ジョアン・デ・ヴェル San João de Ver も出身地の候補とされる。いずれにしてもガリシア東部で活動したジョグラールであろう。現在まで伝わる作品は、カンティーガ・デ・アモール2篇、カンティーガ・デ・アミーゴ6篇、あわせて8篇である。

### 3. ペロ・デ・ヴェル「聖マリアのもとに愛する人を」

- |   |                                     |                        |
|---|-------------------------------------|------------------------|
| 1 | A Santa Maria fiz ir meu amigo      | 聖マリアのもとに、愛する人をひとり行かせた。 |
| 2 | e nom lh' atendi o que pôs comigo ; | いっしょにとせがまれたのに、それに応えずに。 |
| 3 | com el me perdi                     | 私はあの人への愛を失った。          |
| 4 | porque lhi menti.                   | あの人を裏切ってしまったのだ。        |

- |   |                                   |                        |
|---|-----------------------------------|------------------------|
| 5 | Fiz ir meu amigo a Santa Maria,   | 愛する人をひとり行かせた。聖マリアのもとに。 |
| 6 | e nom foi eu i com el aquel dia ; | あの日私は、いっしょにとせがまれたのに。   |
| 7 | <i>com el me perdi</i>            | 私はあの人への愛を失った。          |
| 8 | <i>porque lhi menti.</i>          | あの人を裏切ってしまったのだ。        |

アジュダ写本、欠如。リスボン写本、1130番、242葉表1列。ヴァチカン写本、722番、115葉裏1列。Monaci, p.254 ; Braga, p.138 ; Videira Lopes, II, pp.336sq.

(1) ir /lis. va. mo. br. hir [5行も同様] (2) e nom /va. mo. enon ; lh' atendi /va. mo. lharendi ; pôs /lis. va. mo. pos, br. poz (3) el me /lis. mo. elme, va. elmi' (4) porque /mo. por que (5) santa /va. mo. sancta [sc̃a] (6) i /lis. mo. br. hy (7) el me /va. el emi'

8行2詩節のカンティーガ・デ・アミーゴ。リフレインをとまなう。脚韻の形式は aacc bbcc である。1行目と5行目は詩節ごとの脚韻をそろえるために同じ文章を倒置するだけで、2行目と6行目は言葉の1部を変えてある。これは「詩作の技術」に語られた並行体の技法ドブレ *dobre* のもっとも簡略な形態である。

「聖マリアのもとに行く」«ir a Santa Maria» という表現はこれから先もしばしば登場するが、聖母をまつる聖地や聖堂という具体的な場におもむくことを言う<sup>(51)</sup>。そこには語り手が祈りをささげ、心にかけた聖母の像があることを思わせる。

恋人は語り手の女性と手を取りあって聖母のもとへ行くことを願っていたのだろう。ふたりで聖母に誓いを立てるつもりだったのか。けれども彼女はそれを果たすことをためらってしまう。ともに生きていく日々を思い描きながらも、結局は自分から手を引いてしまったのだ。

ここまでのなりゆきはいっさい語られない。だがわずか8行の詩でもさまざまなプロットが目に見える。作品の規模が小さいだけでなく、2連の詩節にそれほどの変化さえない。切り詰められているからかえって想像を許すのだろう。短いからこそ口ずさみよさもカンティーガにとって大事な要素である。名が知られるだけのジョグラールの作品であっても、ずっと伝えられてきたのは、こうしたふくらみの幅があるためではないか。

#### 4. サンシュ・サンシェス「愛する人はきつともう」

- |   |  |                        |
|---|--|------------------------|
| 1 | Amiga, bem sei do meu amigo            | 女友だち、私の愛する人はきつともうこの世に  |
| 2 | que é mort' ou quer' outra dona bem,   | いないか、それともほかの女性を求めたのです。 |
| 3 | ca nom m' envia mandado nem vem,       | たよりもくれず、戻ってもこないのだから。   |
| 4 | e quando se foi posera migo            | 旅立つとき、あの人約束したのに。       |
| 5 | <i>que se veesse logo a seu grado,</i> | ほほえんですぐに戻ってくるからと。      |
| 6 | <i>se nom que m' enviasse mandado.</i> | すぐには無理でも、たよりを送るからと。    |
| 7 | A min pesou muito quando s' ia,        | あの人旅立ちが私の心を苦しめた。あのとき   |

- |  |                         |
|--|-------------------------|
| 8 e comesei-lhi entom a preguntar :        | すがりつくように尋ねた。愛するあなた、     |
| 9 cuidades muit', amig', alá morar.        | むこうに長くいることになるのかと。       |
| 10 e jurou-mi par Santa Maria.             | 聖マリアの名にかけてあの人は私に誓ったのです。 |
| 11 <i>que se veesse logo a seu grado,</i>  | ほほえんですぐに戻ってくるからと。       |
| 12 <i>se nom que m' enviasse mandado.</i>  | すぐには無理でも、たよりを送るからと。     |
|  |                         |
| 13 U estava comigo falando,                | ふたりで語りあったとき私は尋ねた。あなたに   |
| 14 dixi-lh' eu : que farei se vos nom vir, | 会えないとき、あなたのことづけをすぐには    |
| 15 ou se vosso mandado nom oir             | 聞けないとき、私はどうしたらいいのかと。    |
| 16 ced' [e]ntom jurou-m' el chorando.      | あの人は涙を流して私に誓ったのです。      |
| 17 <i>que se veesse logo a seu grado,</i>  | ほほえんですぐに戻ってくるからと。       |
| 18 <i>se nom que m' enviasse mandado.</i>  | すぐには無理でも、たよりを送るからと。     |

アジュダ写本、欠如。リスボン写本、936番、200葉裏2列～201葉表1列。ヴァチカン写本、524番、83葉裏1列。Monaci, p.190 ; Braga, p.100 ; Videira Lopes, II, p.497.

(1) do meu /lis. va. mo. domeu (2) mort' ou /lis. va. mo. mortou (3) m' envia /lis. menuya, va. mo. men uya (4) quando se /lis. va. mo. quandosse (5) se /lis. va. mo. sse ; veesse /lis. va. mo. br. vehesse ; a seu /va. mo. asseu (6) se nom /va. mo. senon (7) min /lis. mi' ; quando s' ia /lis. va. mo. quandosya (8) e comesei-lhi /lis. va. mo. ecomeceylhi ; preguntar /lis. mo. p' guntar (9) muit' /lis. va. mo. muyta ; amig' /lis. va. mo. miga ; alá /lis. va. mo. la, br. a lá (10) jurou-mi /va. iuroumi, mo. iu roumi ; par /br. per ; santa /va. mo. br. sancta (13) u /lis. va. mo. br. hu (14) dixi-lh' eu /lis. dixilho, va. mo. dixi lho, br. dixi-lh' o ; que /va. mo. br. en que ; se vos /va. eu sevos, mo. br. eu se (15) se /lis. mo. sse (16) ced' [e]ntom /lis. va. mo. çedenton ; jurou-m' el /lis. iurou mel, va. mo. iuroumel

18行3詩節のカンティーガ・デ・アミーゴ。語り手の女性が女友だちを相手に思いを述べていくスタイルである。リフレインをとまなう。脚韻の形式は各詩節とも abbacc である。

どんな事情かはわからない。男は旅立っていった。旅立つ前に情を尽くして恋する女性をなだめた。すぐに戻ってくる。手紙を送る。聖母に誓って約束する……。けれど何ひとつはたされることはなかった。どんなに愛しあっても、いったん離れてしまえばそれきりなのか。離れた刹那はおたがいを思えばかりいるだろう。だが新しい土地に行けば、目の前のことに押し流され、いつしか昔の日々を思い出すことも間遠になってしまう。新しいパートナーと出会う。新しい生活がはじまっていく。どこにでもあることかもしれない。どこにでもあることを歌っているからこそ、人の心をとらえるのだろう。

誰もが聖母に誓った。しかしここではいったいどれだけの意味があるのか。守られることのない約束のために聖母の名が持ち出されるだけなのか。そうした例があることもまちがいなさそうである。

サンシュ・サンシエス Sancho Sanches はガリシア出身のトロバドル。リスボン写本もヴァチカン写本ともにテキストの余白に「聖職者サンシュ・サンシエス」«sancho sanchez cl̃igo» と追記している。サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂に所蔵される教会関係の『古文書集』Tombo C の

なかに、大聖堂の主任司祭がコンポステラの南西にある町オセベ Osebe で土地を取得したときの記録がある。1260年の日付があり、証人を列挙したなかにラテン語表記で彼の名が見える<sup>(52)</sup>。この資料の発見によって、詩人の活動時期がいくらか限定できるようになった。彼の作品の中にサン・サルヴァドル «Sam Salvador» という地名が出てくる<sup>(53)</sup>。これはオセベ近郊にあるサン・サルヴァドル・デ・バスタヴァレス San Salvador de Bastavales に同定されており、資料に記されたコンポステラの聖職者団体の所有地にも近いという<sup>(54)</sup>。

作者は13世紀なかごろに活動したガリシアの聖職者であった。現在まで伝わる作品は、カンティーガ・デ・アモール 1 篇、カンティーガ・デ・アミーゴ 5 篇、あわせて 6 篇である。神父も愛の悲しみを歌うのである。

## 5. ジョアン・ヴァスクス・デ・タラヴェイラ「あなたが会った私の恋人は」

- |    |   |                         |
|----|---|-------------------------|
| 1  | Vistes vós, amiga, meu amigo            | 女友だち、あなたが会った私の恋人は、      |
| 2  | que jurava que sempre fizesse           | 私が言ったことを何でもはたしてくれると     |
| 3  | todo por mi quanto lh' eu dissesse,     | いつも約束していました。それなのに、私に    |
| 4  | foi-se daqui e nom falou migo ;         | 何ひとつ告げずにいなくなってしまったのです。  |
| 5  | <i>e pero lh' eu dixi quando s' ia,</i> | あの人が立ち去っていくとき、たとえ私が     |
| 6  | <i>que sol nom se fosse foi sa via.</i> | 話しかけても、そのまま行ってしまったでしょう。 |
|    |   |                         |
| 7  | E per u foi, irá perjurado,             | あの人がいたとき、女友だち、あの人は      |
| 8  | amiga, de quant' el a mim disse,        | 私に話したことを、たがえようとしたのです。   |
| 9  | ca mi jurou que se nom partisse         | いなくなったりしないとあの人は誓ったのに、   |
| 10 | daqui e foi-se sem meu mandado ;        | 私の頼みをふりすてて行ってしまったのです。   |
| 11 | <i>e pero lh' eu dixi quando s' ia,</i> | あの人が立ち去っていくとき、たとえ私が     |
| 12 | <i>que sol nom se fosse foi sa via.</i> | 話しかけても、そのまま行ってしまったでしょう。 |
|    |   |                         |
| 13 | E nom poss' eu estar que nom diga       | あなたに話さないでははいられません。      |
| 14 | o [mui] gram torto que m' el há feito,  | あの人が私にしたひどい仕打ちについて。     |
| 15 | ca pero mi fezera gram preito           | かたく約束したのに、それをないがしろにして   |
| 16 | foi-se daqui sem meu grad', amiga ;     | あの人はいなくなってしまったのだから。     |
| 17 | <i>e pero lh' eu dixi quando s' ia,</i> | あの人が立ち去っていくとき、たとえ私が     |
| 18 | <i>que sol nom se fosse foi sa via.</i> | 話しかけても、そのまま行ってしまったでしょう。 |
|    |   |                         |
| 19 | E se m' el mui gram torto fazia         | あの人が私をいつわったのなら、聖マリアは    |
| 20 | julgue-me com el Santa Maria.           | 私の嘆きに耳をかたむけてくださるでしょう。   |

アジュダ写本、欠如。リスボン写本、793番、169葉表2列～裏1列。ヴァチカン写本、377番、60葉表2列～裏1列。



Monaci, pp.143sq.; Braga, p.71; Videira Lopes, II, p.16.

(1) amigo /va. mo. a migo (3) lh' eu /lis. va. mo. lheu (4) foi-se /lis. va. mo. fuisse; daqui /br. d' aqui (5) pero lh' eu /lis. va. mo. perolheu; quando s' ia /lis. va. mo. quandossya (6) se /lis. va. mo. sse; fosse /br. foss' e; foi sa /lis. va. mo. foyssa (7) per u /lis. va. mo. peru, br. per' u (8) quant' el /lis. va. mo. quantel; a mim /lis. va. mo. amin, br. a mi (9) ca mi /lis. va. mo. cami; se /lis. va. mo. sse (10) daqui /br. d' aqui; e foi-se /lis. va. mo. efoysse; sem /va. mo. seu (13) poss' eu /lis. va. mo. posseu (14) m' el /lis. va. mo. mel; há /lis. va. a (15) fezera /va. mo. fez' a; preito /va. mo. p' yto (16) foi-se /lis. va. mo. foyssse; daqui /va. mo. daq', br. d' aqui; grad', amiga /lis. va. mo. gra damiga (19) e se m' el /lis. va. mo. essemel (20) santa /lis. va. mo. br. sancta

20行4詩節のカンティーガ・デ・アモール。第三者（ここでも女性の友人）に語りかける形で、第3詩節までリフレインをとらない、末尾に2行を附す。脚韻の形式は第3詩節までいずれも *abbacc* である。

語り手の女性は友人に恨み言をならべている。恋人は自分の願いをたがえたりしないと口説きつけてきたのに、いなくなるときは一言もない。うそばかりの男だった。持って行きどころのない怒りを聖母にまでぶつける始末である。リスボン写本とヴァチカン写本ではこの作品の前に置かれたカンティーガの中で、恋人が戻ってくることがほのめかされている<sup>(55)</sup>。これについてロベスは作品の順序が入れ替わったものと考えた<sup>(56)</sup>。そこにはもう聖母は登場しない。

ジョアン・ヴァスクス・デ・タラヴェイラ João Vasques de Talaveira はカスティーリャ出身のトロバドルとされる。それならば本来の表記はフアン・バスケス・デ・タラベラ Juan Vasquez de Talavera となろう。トレド近郊のタラベラ（現在のトレド県タラベラ・デ・ラ・レイナ Talavera de la Reina）の貴族階級の出と考えられている。

作品のなかにマリア・ペレス Maria Pérez という人名が出てくる<sup>(57)</sup>。これはアルフォンソ10世の宮廷で活動し、マリア・バルテイラ Maria Balteira と呼ばれたガリシア出身の名高い舞踏家である。多くのカンティーガに歌われ、1265年前後に宮廷を去ったという<sup>(58)</sup>。トロバドルやジョグラールの歌にあわせて踊る女性の姿はアジュダ写本の挿画にも描かれている [図2]。おそらくジョアン自身もカスティーリャ・レオン王国の宮廷に出入りしたのであろう。その後、サンチョ4世のガリシア遠征にしたがい、大貴族 *rico-homem* に継ぐ貴族階級インファンサン *ifançon* に名を連ねた<sup>(59)</sup>。

以上のことから13世紀後半に活動したトロバドルであったことはまちがいない。母語はカスティーリャ語であっても、アルフォンソ10世の宮廷に集まった多くのトロバドルにならい、彼もまた詩作の言語としてガリシア＝ポルトガル語を用いたのである。現在まで伝わる作品は、カンティーガ・デ・アモール4篇、カンティーガ・デ・アミーゴ7篇、揶揄悪口のカンティーガ5篇、討論詩テンサオン3篇、あわせて19篇である。

## 6. ジョアン・ソアレス・コエリョ「どんな喜びがあるというのか」

- |   |   |                       |
|---|---|-----------------------|
| 1 | Meus amigos, que sabor haveria          | 友人たち、どんな喜びがあるというのか。   |
| 2 | d' a mui gram coita, 'm que vivo, dizer | 私が作ろうとした歌に思いを込めて、これほど |

- |    |                                       |                          |
|----|---------------------------------------|--------------------------|
| 3  | em um cantar que queria fazer ;       | 大きな悲しみを語ることにいったいどんな…。    |
| 4  | e pero direi-vos como queria,         | 私がどのように願ったかをあなた方に語ろう。    |
| 5  | se Deus quisesse, dizê-lo : assi      | 主が望まれるのなら、このように語ろう。      |
| 6  | que houvessem todos doo de mi         | 友人たちは私の嘆きのすべてを聞いたけれど、    |
| 7  | e nom soubessem por quem mi o dizia.  | どんな女性のことなのか知らなかったろう。     |
|    |                                       |                          |
| 8  | E por esto rogo Santa Maria           | それだから私は聖マリアに祈っている。       |
| 9  | que m' ajud' i, e que me dê poder     | 私を助けて力をあたえてくださるように。      |
| 10 | per que eu torne na terra viver,      | 悩みのあとには苦しみしかない、そんな       |
| 11 | u mia senhor vi em tam grave dia      | みじめな日々のなかで愛する婦人に出会った     |
| 12 | sem outras coitas que depois sofri.   | その土地に行き着くことができるように。      |
| 13 | Ca nom vivera rem do que vivi,        | どうやってそこへ行けるのかと思わずには      |
| 14 | senom cuidando com' i tornaria.       | 生きていくこともできなかったのだから。      |
|    |                                       |                          |
| 15 | Mas cativ' eu, de melhor que queria,  | その土地で暮らしていく以上のことを        |
| 16 | de poder eu na terra guarecer,        | 望んだのはあやまちだった。そこで私は       |
| 17 | u a cuidass' eu a poder veer          | 幾日ものあいだ、たとえわずかな時間でも      |
| 18 | dôs mil dias ãa vez em um dia.        | 婦人を目にすることができると思っていた。     |
| 19 | Já eu est' houv' e perdi-o per mim.   | そんな幸せもみずからの手で失ったのだ。      |
| 20 | Mas tan mal dia ante nom perdi        | あのような不幸な日が訪れるまでは、光を失う    |
| 21 | os olhos, e quant' al no mund' havia. | こともなく、世に不自由のない身だったのに。    |
|    |                                       |                          |
| 22 | Ca par Deus meor míngua me faria.     | 主に誓って、彼女がいなくても私は寂しくなどない。 |

アジュダ写本、159番、40葉裏2列～41葉表1列。リスボン写本、欠如。ヴァチカン写本、欠如。Vasconcelos, pp.319sq. ; Videira Lopes, I, p.596.

(1) haveria /aj. vas. averia (2) d' a /aj. vas. da (5) dizê-lo /aj. dizêlo, vas. dizê' -lo (6) houvessem /aj. vas. ouvessen ; de mi /aj. demin, vas. de min (7) mi o /aj. vas. me (8) santa /aj. vas. sancta (9) dê /aj. de (12) depois /aj. de pois ; sofri /aj. vas. soffri (14) senom /aj. vas. se non (15) cativ' eu /aj. cativueu (17) cuidass' eu /aj. cuidasseu (18) dôs /aj. vas. dos (19) já /aj. vas. ja ; eu est' /aj. eu est, vas. est' eu ; houv' e /aj. ouve, vas. ouv' e (20) mas /vas. mais (21) havia /aj. vas. avia (22) par /vas. por ; meor /aj. vas. mēor

22行3詩節のカンティーガ・デ・アモール。リフレインをとみなわず、末尾に1行を附す。韻律の形式は各詩節いずれも *abbacca* である。

わずかこれだけの分量の中に悲劇の1篇に相当するほどの物語が展開していく。冒頭でトロバドルが友人たちに語り出す。ある貴婦人をめぐって何もかも失った男の物語である。貴婦人の名はあかされない。友人たちの誰もが知る女性だったのかもしれないが、それは伏せたままにしてある。

トロバドールは聖母に祈った。かつて暮らしていた土地に戻ることができるようにと。愛した婦人がいたその土地に帰り着きたい。そのことだけが残された望みのすべてだった。今となっては遠い日々のことである。たとえわずかな時間でもそこにいれば婦人の姿を目にすることができた。それ以上のことを望んだのが不幸のはじまりだったのか。

アジュダ写本の18行目はそのまま読めば「二千日のあいだ一日にただ一度だけ」«dôz mil dias ûa vez em um dia» となる。リオス・ミリヤムは文頭を «de mil dias» の誤写と見なした<sup>(60)</sup>。それならば「幾日ものあいだ」と解することができる。一日のうちわずかでも愛する人を見つめることができた境遇をいうのであろう。ヴィディラ・ロペスは校訂本文のなかで写本の文字を残しつつも、この読みを尊重している<sup>(61)</sup>。ここでもそれにしたがった。

手の届かないところにいた貴婦人のはずである。それでも近くにいられたならそれで十分だったのではないか。なぜそうした分別が働かなかったのか。なぜ、それ以上のことを望んでしまったのか。「あのような不幸な日」に何があったかは記されていない。婦人は去り、男は光を失ったという。ここは絶望したということか、それとも失明したのか。最後にトロバドールは主の御名において誓った。「彼女がいなくても私は寂しくなどない」のだと。

ジョアン・ソアレス・コエリョ João Soares Coelho はポルトガル出身のトロバドール。ポルトガル北部を流れるドウロ川中流のリバドウロ Ribadouro の領主の家系に庶子として生まれ、溪谷沿いのシンファンイス Cinfães で成長した。国王サンシュ2世の弟フェルナンド・デ・セルパ Fernando de Serpa 王子の家臣となり、1235年の記録に貴紳 cavaleiro の身分で登場する<sup>(62)</sup>。王子の巡歴にしたがって1138年にローマにおもむいたのち、1240年から43年までカスティーリャに滞在した。王子は直接の従兄弟にあたるカスティーリャ・レオン王国のフェルナンド3世に仕えた。従者であるジョアンにとっては、かの地のアルフォンソ王子（のちのアルフォンソ10世）のもとに参集したトルバドゥールやジョグラールと交流するまたとない機会を得たことになる。ここでガリシア出身のマリア・フェルナンデス・オルデンス Maria Fernandes de Ordéns と結ばれた。

セルパ王子は1243年にポルトガルに帰国したが、ジョアンがこれに随従したかどうかはわからない。サンシュ2世からアフォンソ3世に王位が移っていく時期にあたり、国内の紛争が深刻化する頃だった。1249年以降、ジョアンは新しい王となったアフォンソの宮廷に召し抱えられ、1254年にはソウト・デ・リバ・オーメン Souto de Riba Homem の領主に任じられた。1279年にディニス1世が王位を継承すると、ジョアンの子息ペロ・コエリョ Pero Coelho は行政長官に昇進した。これ以降はジョアンに関する記録はなく、あまり隔たらない頃に亡くなったとされる。孫のひとりエステヴァン・ペレス・コエリョ Estêvão Peres Coelho が祖父と同じくトロバドールとなったことが知られる。

現在まで伝わるジョアンの作品は、カンティーガ・デ・アモール21篇、カンティーガ・デ・アミーゴ15篇、揶揄悪口のカンティーガ12篇、討論詩テンサオン5篇、あわせて53篇である。

## 注

(1) Carolina Michaëlis de Vasconcelos, *Cancioneiro da Ajuda, edição crítica e commentada*, II, Max Niemeyer, Halle, 1904, p.780.

(2) Oscar Bloch et Walther von Wartburg, *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Presses Universitaires

- de France, Paris, 6<sup>e</sup> éd., 1975, p.654.
- (3) *ibid.*, p.351.
- (4) Jean Rychner, *La chanson de geste : Essai sur l'art épique des jongleurs*, Droz, Genève, 1955, p.17.
- (5) この点もフランスとは事情が異なる。そこでは卑賤の出でも偉大なトゥルバドールとあおがれた人々もいた。そのひとりベルナット・デ・ヴェンテドルン Bernat de Ventadorn は、「トネリコの弓を使いこなす召使いを父とし、母はかまどに火をくべ、蔓草を集めていた」*«en son paire ac bon sirven per trair'ab arc manal d'alborn, e sa maire escalfav'al forn et amassav'a l'issermen»* と歌われ、領主の使用人夫婦の子として知られた。Peire d'Alvernhe, *«Chantarai d'aquestz trobadors»*, Karl Bartsch, *Chrestmachie provençale, X<sup>e</sup>-XV<sup>e</sup> siècles*, Elberfeld, Marburg, 4<sup>e</sup> éd., 1880, col.86 ; Aniello Frata, *Peire d'Alvernhe, Poesie*, Vecchiarelli Editore, Manziana, 1996, p.47.
- (6) Walter Mettmann, *Alfonso X el Sabio, Cantigas de Santa María*, I, Editorial Castalia, Madrid, 1986, pp.19sq.
- (7) Graça Videira Lopes, *Cantigas medievais galego-portuguesas : Corpus integral profano*, 2vol., Biblioteca Nacional de Portugal, Lisboa, 2016, p.w. [Sobre as cantigas, dados gerais] ヴィデイラ・ロペスの校訂本には本文の記述をおぎなう情報がリスボン新大学中世研究所 Instituto de Estudos Medievais, Universidade Nova de Lisboa から書名と同じタイトルのウェブページで公開されている。本文に含まれない記事は p.w. (página web) と略記して該当項目を示したい。
- (8) *ibid.*, I, p.17.
- (9) *ibid.*, II, p.594.
- (10) *ibid.*, II, p.591.
- (11) Vasconcelos, *op. cit.*, 1904.
- (12) Henry Carter, *Cancioneiro da Ajuda. A Diplomatic Edition*, Oxford University Press, 1941 ; rpt. com introdução pela Maria Ana Ramos, Imprensa Nacional, Casa de Moeda, Lisbon, 2007 ; <https://cantigas.fcsh.unl.pt/>
- (13) Videira Lopes, *op. cit.*, I, p.15.
- (14) Luís Filipe Lindley Cintra, *Cancioneiro da Biblioteca Nacional (Colocci-Brancuti) cód.10991*, reprodução facsimilada, Imprensa Nacional, Casa de Moeda, Lisbon, 1982.
- (15) Videira Lopes et al., *op. cit.*, 2016.
- (16) Ernesto Monaci, *Il canzoniere portoghese della Biblioteca Vaticana*, Max Niemeyer, Halle, 1875 ; Joaquim Teófilo Fernandes Braga, *Cancioneiro português da Vaticana, Edição crítica restituída sobre o texto diplomático de Halle*, Imprensa Nacional, Lisboa, 1878.
- (17) Manuel Pedro Ferreira, “Leo o pergaminho Vindel : suporte, textos, autor”, Graça Videira Lopes e Manuel Pedro Ferreira, *Do canto à escrita : Novas questões em torno da lírica galego-portuguesa, Nos cem anos do pergaminho Vindel*, Instituto de Estudos Medievais /Centro de Estudos de Sociologia e Estética Musical, Lisboa, 2015, pp.19-28.
- (18) Leticia Eirin, “As cantigas do pergaminho Sharrer. Motivos fundamentais”, Videira Lopes et al., *Do canto à escrita, op. cit.*, pp.92-108.
- (19) 1 例として次のものがある、Paul Hillier (baryton) et al., *Cantigas : Martin Codax, Jaufré Rudel, Dom Dinis*, Harmonia Mundi, Paris, 2006.
- (20) Videira Lopes, *op. cit.*, II, p.592.
- (21) Maria Dulce Leão, “Notre Dame dans la littérature portugaise”, Hubert du Manoir, *Maria, Études sur la Sainte Vierge*, II, Beauchesne, Paris, 1952, p.251.
- (22) João Airas de Santiago, «Rui Martiiz, pois que ést[e] assi», Videira Lopes, I, *op. cit.*, p.468.
- (23) António Resende de Oliveira, *Depois do espectáculo trovadoresco. A estrutura dos cancioneiros peninsulares e as recolhas dos séculos XIII e XIV*, Edições Colibri, Lisboa, 1994, p.357.

- (24) José António Souto Cabo, “«En Santiago, seend’ albergado en mia pousada». Nótulas trovadorescas compostelanas”, *Verba, Anuario galego de filoloxia*, XXXIX, Santiago de Compostela, 2012, p.290.
- (25) João Airas, «Meu senhor rei de Castela», Videira Lopes, *op. cit.*, I, pp.438sq.
- (26) João Airas, «O voss’ amigo que s’ a cas d’ el-rei», Videira Lopes, *op. cit.*, I, pp.462sq.
- (27) João Airas, «Dizem, senhor, que nom hei eu poder», Videira Lopes, *op. cit.*, I, p.426.
- (28) Paio Soares de Taveiros, «Meus olhos, quer-vos Deus fazer», Videira Lopes, *op. cit.*, II, pp.235sq.
- (29) Xabier Ron Fernández, “Carolina Michaelis e os trovadores representados no Cancioneiro da Ajuda”, Mercedes Brea (ed.), *Carolina Michaelis e o Cancioneiro da Ajuda, hoxe*, Xunta de Galicia, Santiago de Compostela, 2005, p.139.
- (30) Paio Soares, «Vi eu donas em celado», Videira Lopes, *op. cit.*, II, p.417.
- (31) Yara Frateschi Vieira, *En cas dona Maior: Os trovadores e a corte senhorial galega no século XIII*, Edicións Laiovento, Noia, 1999, pp.50–60.
- (32) José Carlos Miranda, “Será Afonso, o sábio, o «autor anónimo» de A36–A39?”, Maria do Rosário Ferreira, Ana Sofia Laranjinha e José Carlos Miranda (ed.), *Seminário medieval 2009-2011*, Estratégias Criativas, Porto, 2011, pp.99–124.
- (33) António Resende de Oliveira, “O Irrequieto Cancioneiro Profano do Rei Sábio”, *Revista Portuguesa de História*, XLIV, Coimbra, 2013, pp.272–274.
- (34) Jaufre Rudel de Blaia, «Lanquan li jorn son lonc en may», Alfred Jeanroy (éd.), *Les chansons de Jaufré Rudel*, Les classiques français du moyen âge, Honoré Champion, Paris, 1915, p.14.
- (35) Camille Chabaneau, *Les biographies des troubadours en langue provençale*, Édouard Privat, Toulouse, 1885, p.10.
- (36) Rui Queimado, «Direi-vos que mi aveo, mia senhor», Videira Lopes, *op. cit.*, II, p.488.
- (37) Pero Garcia Buralês, «Roi Queimado morreu com amor», Videira Lopes, *op. cit.*, II, p.372.
- (38) Resende de Oliveira, *op. cit.*, p.435 ; Ron Fernández, *op. cit.*, pp.151sq.
- (39) Rui Queimado, «Dom Estêvam, em grand’ entençom», Videira Lopes, *op. cit.*, II, p.492.
- (40) João Soares Coelho, «Dom Estêvam fez[o] sa partiçom» ; Mem Rodrigues Tenoiro, «Dom Estêvam achei noutro dia» ; Airas Peres Vuitorm, «Dom Estêvam, tam de mai talam», Videira Lopes, *op. cit.*, I, p.135, 616 ; II, p.157.
- (41) José Augusto Pizarro, *Linhagens medievais portuguesas: genealogias e estratégias 1279-1325*, I, Centro de Estudos de Genealogia, Heráldica e História da Família da Universidade Moderna, Porto, 1999, p.221.
- (42) Walter Mettmann, “Airas Nunes, Mitautor der Cantigas de Santa Maria”, *Iberoromania*, III, Madrid, 1971, pp.8–10.
- (43) Giulia Lanciani e Giuseppe Tavani, *Dicionário da literatura medieval galega e portuguesa*, Editorial Caminho, Lisboa, 1993, p.27.
- (44) Airas Nunes, «O meu senhor o bispo, na Redondela», Videira Lopes, *op. cit.*, I, p.131.
- (45) Airas Nunes, «A Santiag’ em romaria vem», Videira Lopes, *op. cit.*, I, p.127.
- (46) Resende de Oliveira, *op. cit.*, p.344.
- (47) José António Souto Cabo, *Os cavaleiros que fizeram as cantigas. Aproximação às origens socioculturais da lírica galego-portuguesa*, Editora de Universidade Federal Fluminense, Niterói, 2012, p.114.
- (48) Videira Lopes, *op. cit.*, p.w. [Pero de Ver, «Assanhei-me-vos, amigo, n’ outro dia»]
- (49) Resende de Oliveira, *op. cit.*, p.414.
- (50) Pero de Ver, «Ai Deus, que doo que eu de mi hei», Videira Lopes, *op. cit.*, II, p.336.
- (51) Dulce Leão, *op. cit.*, p.251.
- (52) José António Souto Cabo, “*In capella domini regis, in ulixbona* e outras nótulas trovadorescas”, Antonia



- Marténeez Pérez y Ana Luisa Baquero Escudero, *Estudios de literatura medieval: 25 años de la Asociación Hispánica de Literatura Medieval*, Universidad de Murcia, 2012, p.783 : «facta carta IIII<sup>a</sup> idus octobris, era ma CC<sup>a</sup> LXL<sup>a</sup> VIII<sup>a</sup>. nos, iam dicti, in hac carta manus nostras. Qui presentes fuerunt : Dominicus Pelagii de Monte. Iohannes Arie, rasor domini archiepiscopi. Dominicus Petri et Sancius Sancii, clerici.»
- (53) Sancho Sanches, «Em outro dia em Sam Salvador», Videira Lopes, *op. cit.*, II, p.499.
- (54) Miguel Ángel Pousada Cruz, “Las cantigas de Sancho Sanchez, clérigo”, *Estudios románicos, Revista de filología románica*, XXIV, Murcia, 2015, p.174.
- (55) João Vasques de Talaveira, «Do meu amig’ a que eu defendi», Videira Lopes, *op. cit.*, II, pp.15sq.
- (56) Videira Lopes, *op. cit.*, p.w. [João Vasques de Talaveira, «Vistes vós, amiga, meu amigo»]
- (57) João Vasques de Talaveira, «O que veer quiser, ai cavaleiro», Videira Lopes, *op. cit.*, II, p.18.
- (58) Carlos Alvar Ezquerro, “María Pérez, Balteira”, *Archivo de filología aragonesa*, XXXVI-XXXVII, Zaragoza, 1985, p.20.
- (59) Resende de Oliveira, *op. cit.*, p.374.
- (60) José Ríos Milhám, “Lírica trovadoresca em língua portuguesa, Exercícios ecdóticos”, II, 2018, n.151. <https://independent.academia.edu/JoséRios>
- (61) Videira Lopes, *op. cit.*, p.w. [João Soares Coelho, «Meus amigos, que sabor haveria»]
- (62) José Mattoso, “A nobreza medieval portuguesa no contexto peninsular”, *Naquele Tempo. Ensaios de História Medieval*, Círculo de Leitores, Lisboa, 2000, p.330.

Fé e belas letras da Santa Maria nas cantigas medievais gelego-portuguesas, I  
As cantigas do murmurinho dos namorados

KIKUCHI Noritaka

**resumo**

Este trabalho enseja uma exploração sobre a fé medieval na Nossa Senhora ao lado oeste da península Ibérica, na região atualmente dividido em Galicia da Espanha e Portugal, lendo algumas das cantigas seculares pela língua galego-portuguesa que eram compostas durante os quase cem cinquenta anos, desde o fim do século XII até ao meados do século XIV. Para tanto temos a configuração seguinte.

Capítulo I. Arte de trovadores : 1. A linguagem da poesia rímica ; 2. Diversidade dos géneros ; 3. Os manuscritos e a música dos Cancioneiros.

II. As cantigas do murmurinho dos namorados : 1. «Pelo soute de Crexente» do João Airas de Santiago ; 2. «A rem do mundo que melhor queria» do Paio Soares de Taveiros ; 3. «De mia senhor direi-vos que mi avém» do Rui Queimado ; 4. «Bailade hoje, ai filha, que prazer vejades» do Airas Nunes.

III. As cantigas da tristeza do amor : 1. «Disse-m' a mi meu amigo» do Fernão Rodrigues de Calheiros ; 2. «Assanhei-me-vos, amigo, n' outro dia» do Pero da Ver ; 3. «A Santa Maria fez ir meu amigo» do mesmo ; 4. «Amiga, bem sei do meu amigo» do Sancho Sanches ; 5. «Vistes vós, amiga, meu amigo» do João Vasques de Talaveira ; 6. «Meus amigos, que sabor haveria» do João Soares Coelho.

IV. As cantigas da aflição da viagem : 1. «Ir quer' hoj' eu, fremosa de coração» do Afonso Lopes de Baião ; 2. «Disserom-mi ãas novas de que m' é mui gram bem» do mesmo ; 3. «Quer' ir a Santa Maria» do Airas Pais ; 4. «Por vee' lo namorado» do mesmo ; 5. «D' ir a Santa Maria do Lag' hei gram sabor» do Fernão do Lago.

V. As cantigas para louvar a Santa Maria : 1. «Senhor fremosa, mais de quantas som» do Afonso Mendes de Besteiros ; 2. «Ai senhor fremosa, por Deus» do Dinis I ; 3. «Quer' eu em maneira de proençal» do mesmo ; 4. «Senhor, em tam grave dia» do mesmo ; 5. «Nostro Senhor Deus, que prol vos tem ora» do Pero da Ponte.

VI. A fé medievais portuguesa na Nossa Senhora, 1. As cantigas seculares, 2. As cantigas religiosas.

**palabras clave** : cantiga, galego-português, fé na Santa Maria, belas letras européias medievais

---